



252.5  
131

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25

始



3714



奈良縣女子師範學校長

守内喜一郎著

の生活形式

東京明治圖書株式會社

大正  
15. 10. 19  
内交

252.5-131

### 兒童の生活形式序

私が教職に従事してゐることもはや滿二十年になる。其の間常に私の精神の中心を支配して來た問題は兒童や生徒の人格の陶冶、個性の伸長の問題である。それで出來得る限り此の問題に關聯ある諸種の著書を読んで見た。其の中で最も私の興味を惹いたものの中に生活形式の問題がある。此の問題は恐らく教職にあつて私のやうな問題を抱いてゐる人にとりては私と同様に興味があるだらうと思ふ。

生活形式について私の讀んで見たものは、

1 Spranger, Lebensformen, 3 Aufl, 1922.

辻幸三郎氏の『文化哲學概論』はこの書の一九二一年版の全譯である。

2 Erich Stern, Einleitung in die Pädagogik, 1922.

序

## 3 Erich stern Jugendpsychologie, 1923.

## 4 Spranger, Der gegenwärtige Stand der

Geisteswissenschaften und die Schule, 2 Aufl. 1925.

の四書である。私は、大正十三年、私の目下奉職してゐる奈良縣に於て縣下の初等教育者を集めて講習會が開かれた際に生活形式について約二十時間ばかり講演をした。また大正十四年に奈良女子高等師範學校附屬小學校の「學習研究」に生活形式について三回に亘つて書かして頂いた。今度明治圖書株式會社の藤原君が來て、生活形式に關する研究を公けにしては如何かと勧められて遂にこれを公けにすることにした。

私は學者ではなく教職に従事してゐる實際家である。生活形式についても私独自の研究がない。シュプランガやエリッヒ・シュテルンの著書を読んで、それを日本語で可成忠實に書き現はしたといふにすぎない。たゞ兒童の生活

形式を中心として叙述の順序に多少の工夫を試みたといふにすぎない。それで翻譯としないで著述としたが、編纂したといふ方が當つてゐるであらう。

とにかく兒童や生徒の人間の陶冶、個性の伸長を問題として居られる教育者にとりては生活形式の研究が大いなる貢獻をなすことを信じて疑はない。此の小著がかゝる教育者に多少なりとも寄與する所があれば幸とする所である。

私がシュプランゲルの「生活形式」や、エリッヒ・シュテルンの「教育學序論」や、「青年心理學」を読むやうになつたのは京大の小西博士に教へて頂いたのであり、またシュプランゲルの「精神科學の現状と學校」といふ書は奈良女高師の横山校長から頂いて讀んだのである。生活形式について奈良縣で講演する機會を與へられたのは當時の奈良縣視學倉本氏の好意によるものであり、「學習研究」にこれについて書く機會を與へられたのは奈良女高師木下主事の好意によるものである。本書の出版については明治圖書株式會社の藤原氏に

序

四

負うて居る。茲にシュプランゲル、シュテルン並に上記の諸氏に謹んで感謝の意を表する。

大正十五年五月

春緑滴る奈真にて 守内喜一郎

### 兒童の生活形式目次

序	一
第一章 人格の了解	一
第二章 生活形式の概念	九
第三章 理論的生活形式	三〇
第四章 美的生活形式	三六
第五章 經濟的生活形式	四六
第六章 社會的生活形式	五八
第七章 政治的生活形式	六五
第八章 宗教的生活形式	七三
第九章 生活形式樹立の價值	八六

目次

一

第十章 兒童心理學の歴史的概観…………… 八二

第十一章 兒童心理學の新課題…………… 八九

第十二章 精神發達の條件…………… 一〇一

第十三章 兒童前期の生活形式…………… 一〇八

第十四章 兒童後期の生活形式…………… 一一三

第十五章 青年期の生活形式…………… 一二三

第十六章 教育者の生活形式…………… 一七四

# 兒童の生活形式

守内喜一郎著



## 第一章 人格の了解

兒童の質問に對する二様の態度——犯罪者の行爲に對する二様の態度——自分の精神に對する二様の態度——目的觀的心理學と因果的心理學、精神科學的心理學又は構造心理學と自然科學的心理學又は要素心理學——近世心理學と人格の了解——人格了解の方向轉換

私共は他人の内的經驗に對して二様の態度を採ることが出来る。兒童が質問する場合に、第一に兒童の質問の意味を了解する態度を採ることが出来る。

第一章 人格の了解

この場合には私共は自ら兒童の思想に入り込んでこれを了解しようと努める。かうして兒童の其の場合の全内的經驗が私共に明らかとなり、完全に其の意味が了解せられる。併し私共は質問の意味を穿鑿しないで、どうして此等の觀念が兒童の心意に入り込んだか、どうして此等の質問が兒童心意に入り込んだか、どうして此等の質問が兒童の意識に起つたか、此等の質問は如何なる要素から成つてゐるかなどと傍觀的に兒童の其の場合の内的經驗を觀察する態度を採る事も出来る。此の場合には私共は兒童の心意を一種の心的機制 (mental mechanism) として眺め、此の場合の兒童の内的經驗を種々に説明する。

此の二様の態度は他人の如何なる經驗に對しても發現することが出来る。犯罪者がある場合に、犯罪者の心中にある動機と目的とを了解する態度をとることが出来る。此の場合には私共は犯罪者の心中に入り込んで行く。かうして犯罪者の情緒と執意と犯罪とを凡て彼れの人格の表現として了解する。

併し此の犯罪者を全く異つた見地から觀察することも出来る。即ち如何なる原因から此の犯罪行為が此の犯罪者に起つたか、此の犯罪者の教育の程度其の生活習慣、其の健康状態が此の犯罪に對してどれほどまで責任があるかなどを考察する態度をとることも出来る。

此の他人の精神を眺める二様の態度は私共自身の心的生活を考察するときにも同様に存し得る。私共が他人と交際する際に、私共の愛情や憎悪や、私共の同意や不同意や、私共の觀念や思考は私共の自我の生活を代表する活動であることが出来る。此の場合には私共は此等の感情や情緒や思考の中に生きて居る。即ち私共自身は此等の内的活動に外ならぬ。けれども私共は此の同一の内的生活を觀察する傍觀者の態度をとることも出来る。此の場合には私共の記憶や想像や感情や執意などは私共の認知する對象として私共に展開する。前の態度の場合には私共の意志や感情や思想は私共にとりては自我の

表現である生活の流れであり、後の態度の場合には私共の意志や感情や思想は私共にとりては傍觀的に觀察し得る心的過程である。

第一の態度は生活を生活することによつて生活の意味を了解するものである。體驗によつて生活の意味を了解するものである。ドイツ人(Dilthey)の所謂レーベン(Leben)によつてレーベンを捕へる態度である。即ち全心的生活を人格の意味の表現として、即ち全心的生活を目的實現の系統として取扱ふものである。第二の態度は生活を傍觀的に觀察することによつて生活を説明せんとするものである。即ち全心的生活を心的過程の因果的説明系統として取扱ふものである。ミュンシュテルベルヒ(Münsterberg)は前の態度による心理学を目的觀的心理学(purposive psychology)と呼び、後の態度による心理学を因果的心理学(causal psychology)と呼んで居る。シュプランガ(Spranger)やエリッヒ・シュテルン(Erich Stern)などはまへの態度の心理学を精神科學的心理

學(geisteswissenschaftliche Psychologie)又は構造心理学(Strukturpsychologie)と呼び、後の態度の心理学を自然科學的心理学(Naturwissenschaftliche Psychologie)又は要素心理学(Elementarpsychologie)と呼んで居る。

人格を了解するには第一に第一の態度によらねばならぬ。第二の態度はこれを補足するものである。然るに近世心理学は自然科學と密接なる關聯に於て發達した爲に、自然科學と同様の研究方法を利用した。即ち近世心理学は内的經驗を最後の要素に分解せんことを求め、またこれらの要素から全體を再構成するために、此等の要素間の法則的關聯を決定することを求めた。併しかゝる心理学の研究法は間もなく限界に到達した。即ち要素から人格を建設することは終に成功しなかつた。エリッヒ・シュテルンが云つてゐるやうに實に「近世心理学は人格の研究に對しては餘りなす所がなかつた。近世心理学は多くは人格の研究を避けた。何となれば此の見地が人格の研究を十分なし



遂げ得るためには、満足でないやうに思はれたからである。或は此の方面の心理學の手段が人格の研究に對しては不十分であるといふ感じがあつたからである。それにも拘らず近世心理學が人格の問題に向つた場合には、多く個々の特徴 (Merkmale) の綜合に於て迷つた。此の事は精神描寫法 (Psychographischen Methode) についても餘程まで事實である。精神描寫といふ語によつて私共は——傳記に對して——個性研究の方法を意味して居る。個性研究の方法は個人に存する特徴の統一からではなく、その多様から出發し、それを心理學の見地から排列するのである。精神描寫では個性が一系列の特徴に分解せられ、その統一が破壊せられ、斷片からの建設が求められる。此の使命が果さるべき特徴表がつけられる。かゝる分解が或る目的に對して使用せられ得る。併し、此の斷片から個性を建設する事は不可能であるやうに思はれる。同様の特徴も人格の活動としては全く異つた面目を呈して來るからである。併し、

如何にせば此の表についてもつと進んだ仕上げが出来るかを尋究するならば、前以て人格の統一に關する表象を持たねばならぬといふことが云はれるに相違ない。何となれば然らざれば精神帶 (geistige Band) を缺つてゐる部分のみが存するにすぎないからである。實に特徴の綜合に際しては、その統一について何か意識して居なければならぬといふことを云ひ得る——然らざれば此の特徴の綜合は實を結ぶに至らない。單なる特徴表からは、此の個々の特徴が如何に分類せられるか、各特徴が全體に對して如何なる意義を有するかを決して見ることが出来ない。各特徴は全體に對する關係によつてのみ一般に了解せられる。全體から特徴が個々として決定せられる。全體即ち精神帶が一旦與へられるならば、精神描寫研究が多く個々によつて全體を有効に補ひ得る。精神描寫研究は個性了解の準備といふよりは寧ろ個性の了解を補ふことが出来る。私共は云は、全體から出發せねばならぬ。斷片から出發せ

ずして人格の全體から出發する心理學のみが人格の問題に到達することが出来る。』

『私共は個々の作用を個性の關聯中に排列し得るときに、個々の作用を了解する。個々の作用が分離して存在して居り、作用者に何等の關聯をも持たぬならば、即ち個々の作用が私共に個性の表現として見えないならば、私共は個々の作用を了解せぬ。近世犯罪心理學が、罰すべきは犯罪ではなく、犯人であるといふ命題を樹立したときに、犯罪心理學は了解に於ける方向轉換を完成した。犯罪心理學は罪ある行爲を分離せられて居る行爲として、また分離して判斷せられる行爲として了解せずして、精神の總構造 (Gesamtstruktur) から了解せられる行爲として了解する。私共が個人の精神に於ける價值判斷の構造を知るときに、その個人を了解する。此の點から私共は生活形式の概念に到達することを求めねばならぬ。』

## 第二章 生活形式の概念

生の伸長性と豊饒化性と——生を見る二様の見方と目的性と——生の形式化  
 ——認識の形式——認識の形式の限界——六種の精神構造——精神作用の關聯——人格の了解は人格の中心から出發せねばならぬ——人間の特殊性と普遍性と生活形式——本書の企圖

私共には生きる力が内在して居る。此の生といふ不思議な力が私共を活動せしめて居る。私共の生れてから死に至るまでの凡ての活動は皆此の生の力の持続と擴張とに外ならない。生の力が私共を活動せしめて、自らを持續し擴張して何を創造し、何を建設しつゝあるか。先づ生の力を有するもの、活動の跡を見るに、單純なる生物から複雑なる生物に、複雑なる生物から人間に、更に原始人から文明人に押し進んで居る。精神の活動について見るに、

無意識的の活動から有意識的活動に、有意識的活動から反省的活動に押し進んで居る。されば生の力は凡ての存在を不完全より完全へ、貧弱より豊饒への一路に立たせて押し進めて居ると見ることが出来る。生の力は絶えず自ら無限に伸びて豊饒になつて行く。私共の一生は此の生の永久の豊饒化に参加して居るに外ならぬ。

自然科学的立場に立つ人は多く生の豊饒化の事實を單に因果律に支配せられて居る自然現象としての生の力と環境の力とに歸する。即ち人間も蒸氣機關や時計の複雑なるものにすぎないと見る。今日なほ生命現象を人為的に創造することも出来ない、また説明し盡すことも出来ないのは全く自然科学の進歩が未だ足りないからであると考へて居る。併し、一方には生命現象は一面にては因果律の行はれて居る世界にあつて其の支配を受けて居ることは事實であるが、生命現象は自然科学的立場からは到底説明し盡されないと唱ふ

る學者もある。亞米利加の チェニングズ (H. S. Jennings) の如きは其の一人である。自然科学的立場からは到底説明し盡し得ざる事實を解釋するものは精神科學的立場である。精神科學的立場よりすれば生は一面因果律に支配せられる自然界にありながら一面理想の實現、價値の實現を理想とする精神の世界、自由の世界に自らを存續し、擴張しつゝあるものである。これが生命の目的性であり、生命の本質である。因果の世界にあることも結局は此の生の本質に基づいて居ると見ることが出来る。何となれば因果律に制約せられて居ることは結局生の目的性と豊饒化性とに寄與することに立ち至るからである。夫故に生は因果律に支配せられながらこれを突破して無限に伸長してやまないのである。生命の歸趣は絶えず價値を實現しつゝ無限に進歩發展する所にある。人生の意味は實に茲に存する。

生が具象化して私共の生活となる。私共の生活は絶えず變化流動してやま

ない。併しながらエリッヒ・シュテルンも云うて居るやうに、「生活そのものが既に形成せられる如く、實に精神生活は一般に形式なしには考へられないやうに思はれる。」『形式と生活とは恰も二つの分たれたる部分の如くに對立せずして生活がある所に既に形式が存する。此の形式は固定的な不變化的のものではなく、生活が進み行く所に形式が常に自らを形成して行く、此の場合には一定の傾向が既に生活の中に存してゐる。此の形式は生きて發展する形式である。それ故に此の形式の固定的な概念は適當ではなく、概念が生活を把束せんとするときに形式を固定し、硬化せねばならぬのである。』

『カントが認識の重心を自然から認識主觀へ移したことを、カント自らコペルニクスの轉回として表現した。人間は先驗的 (apriori) に自らの中に有する認識の根本形式の助けによつて自然を認識する。眞理はこれまで採用せられたやうに實際の事實と私共の思惟との一致に存在し得ない。私共の概念その

ものは事實に従つて決定せられ得ない。寧ろ事物そのものは私共の概念に従つて決定せられねばならぬ。或は他の語を以て云へば私共は事物を、事物が私共の直觀及び思惟の形式に入り込む限りに於てのみ認識する。精神は材料が認識せられるために入り込まねばならぬ形式を與へる。』併し、認識は生が人間に現はれる唯一の形式ではない。

然るに従來注意が第一に認識の形式に向ひ、其の他の生の形式に向はなかつたことには正當の根據がある。エリッヒ・シュテルンも云つてゐるやうに、『人間が生活し得るためには疑もなく或る量の知識を要する、人間が全く知識を持たぬならば階段上の小供のやうに轉げ落つるであらう。生活に對して認識の重要なることが人間に早くから既に現はれたに相違ない。これが常に人間を科學に進めた強い動機であつた。豫見のための知識 (savoir pour prévoir) は以前にも今日の如く有効であつた。』併し、此の認識が終に制限に到達

した。私共は事物の中で私共に存する認識の形式に入り込むもののみを認識する。此の認識の形式に入り込まない部分へは認識の形式では近寄れないのである。ゲーテ (Goethe) は曾つて、『私共の存在の總和は理性によつて分たれるが、決して純粹に分たれないで、常に驚くべき断片があとに残る』と云つた。此の断片そのものは認識の手段では甚だ不完全にしか理解せられない。

實に私共の生の形式は認識の形式のみでは盡されないと見なければならぬ。私共には認識の形式のやうにアプリオリに與へられてあるに相違ない他の精神的構造があらねばならぬ。凡て生の宿れる統一體は環境の支配を受けてゐるが、環境によつて全く支配し盡されるものではない。進んで環境を突破し、これを支配することが出来るものである。かゝる生命の統一體の精神状態に一種の組織が存する。かゝる組織をデイルタイは、精神生活の構造 (Die Struktur des Seelenlebens) と呼んで居る。かゝる精神生活の構造は生の力の具象

化の方向を示すものであつて、此の方向は各個人によつて千態萬様である。ジムメル (Simmel) はかゝる精神の根本形式として認識と宗教と藝術の三種をあげてゐる。シュプランガやエリッヒ・シュテルンは此の三形式は精神作用の多様を完全に盡さぬものとし、本質的に六つの根本方向を區別して居る、經濟的 (wirtschaftliche)、藝術的 (ästhetische)、理論的 (theoretische)、社會的 (soziale)、政治的 (politische)、宗教的 (religiöse) の六つの根本方向がこれである。此の系列が生命發展の今日の階段に於ては完全に凡ての意味領域を盡して居るやうに見える。従つて凡ての個々の意味ある行動が此等の意味方向に還元せられることが可能であらねばならぬ。

此等の精神の方向が實に私共の個性、人格の本質を形成するものである。私共の人格の了解はこゝから出發せねばならぬ。今私共が一つの問題を熟慮し、其の問題の解決を試みるとせよ。此の問題と關聯する思考が起つて來る。

此等の思考が私共を進めるか、進めないかに従つて或は採用せられ、或は拒絶せられる。新らしい表象が表はれる際に既に目的への私共の轉向によつて條件づけられて居る。私共は更に私共を追ひ進める緊張の感じ、不安の感じ、壓迫の感じ、或は私共が一步進むときには解決の感じを體驗する。また努力が私共を前方に押し進める、私共を休ませない。かく凡ての個々の體驗は眞理の認識に向けられる研究の動作に對して重要である。此の價値の指圖によつてのみ個々の内容と體驗とが了解せられる。私共が只個々の感覺や、表象や、感情や、努力のみを描寫するならば決して意味に満ちた全體即ち個人を支配する精神的動作を建設することが出来ない。個々の要素は始めから、入り込んで一部分となつてゐる體驗の全體に關聯してゐる。

學者、藝術家、政治家などの人格、個性の了解が、夫らの人の精神の諸要素を認識したからと云つて出来るものではない。私共は第一に此等の人の精

神方向の基調をなしゐる方向を捕へなければならぬ。第二には此等の人の精神の諸要素がこれに對して如何なる任務をなしてゐるかを見なければならぬ。各人の精神の基調方向即ち各人の價値追求の基調が、各人の人格、個性の中心をなすものである。此の中心から出發して始めて各人の人格、個性の了解が可能となるのである。

人間は人間であつて凡て他の動物と區別せられる點より見れば人間は人間としての普通の姿を有してゐると見なければならぬ。併し、如何なる個人も亦他と區別せられる點より見れば各個人は夫々特殊性を有して居ることも亦事實と見なければならぬ。これは人間の生の力が無限に多様に無限に豊富に發展する本性を有するに基づいて居る。エリツヒ・シュテルンも偏倚 (Einkseitigkeit) は人間の運命である。偏倚は人間の精神の本質中に存する。人間は正しく人間である。世界を常に一方面から見るとやうに運命づけられて居る。

神のみが凡ての方面を見、凡ての方面を實現することが出来る。此の必然的偏倚の中に個人教育の問題がその根據を見出し得るのである」と云つてゐる。「併し、此の偏倚は絶對的ではない、恰も認識の方向が何人にも缺けてゐないやうに、どれかの方向が完全に缺けてゐることはない。各精神方向は各人に存する、實に各精神的動作に存する。併し、人間はどの方面からか世界を見るやうに思はれる。即ちどの中心からか人間の存在が定められてあるやうに思はれる。此の中心から價值方向が定められるのみならず、價值がまだ此の中心を定める。常に一つの精神方向が支配者として置かれるときには、これに應じて人格の理想的根本型が生ずるのである。此の型は經驗によつて表はれる、併し、此の型はまた經驗が表はすより以上のものを包含して居る。私共は純粹な理想的根本形式を表現しようと求めて居るのであるが、實際に於てはかゝる根本形式は中々現はれない。私共は眞實の私共を云はゞ最も純

粹に、最も完全に進めようとするときに、私共に内在して居る根本形式が表現するのである。此の各種の典型の各々に於て一定の存在が基礎づけられて存するのみならず、同時にまた此の存在の本質を完全にしようとする要求が存して居る。此の根本形式の各々に於て、自然に多様の個人的傾向を表はす價值方向の全く一定した典型的の建設が存する。それで生活が流れて行く全く一定した形式が常に存するのである。私共は理想化と單純化とによつて到達する此の理想的根本形式 (idealen Grundformen) を生活形式 (Lebensformen) として表現する。此の根本形式が教育問題に對して重大なる意味を有することは自明のやうに思はれる。」

私は本書に於てはエリツヒ・シュテルンの兒童の生活形式を述べるのが主であるが、その理解を容易にするために先づ氏の成人の生活形式より入るつもりである。

### 第三章 理論的生活形式

(Die theoretische Lebensform)

理論人の態度——藝術に對して——經濟に對して——社會及び政治に對して——宗教に對して——各自の行動に對して。

理論人 (Der theoretische Mensch) にとりては此の世界は認識の課題のやうに見える。一般的判断の系統に到達すること、實在の客觀的描寫をなすことが理論人の目的である。各出來事に對して理論人はその原因を求め、原因と結果との法則的結合を發見し終るまではやまない。因果律で説明せられないことは理論人にとりては興味の對象とも努力の對象ともなり得ない。理論人の此の態度は理論人の人格の凡ての方面の破滅、云はゞ理論人が生活してゐる

生々たる關聯からの脱離を豫想する。夫故に理論人の本質は冷靜であり、非人間的である——理論人が正當に研究し得んがためには自らに内在する全人間を亡ぼさねはならぬからである。理論人の世界は認識し、何物に對しても僻易せざる悟性の世界である。人間に於ても事物に於ても理論人の興味を惹くものは人格、個性、特殊ではなく、普遍である。此の普遍は早くから知的諸力の中に見出されるから、理論人は人間に於て知力のみを見、感情や衝動を輕んじがちである。それ故に理論人は決して人間を公平に評價せぬ、が此のことは理論人には合點の行かない所である。

一回的であり、感覺的であり、全人的協同を要求する藝術を理論人は餘りに主觀的であるとして排斥する。理論人は藝術品を味ふよりは寧ろ藝術品の理念を發見しようと欲する。理論人は藝術品に於ても云はゞ事物の背後を眺めようと欲する。夫故に理論人は藝術を美學的に分解することに傾く。理論



人の興味を惹くものは純粹に藝術によつて働く素朴的藝術家にあらずして、寧ろ問題について努力する藝術家である。夫故に音樂に於ては理論人はモーツァルト (Mozart) よりハートヴェン (Beethoven) に傾く。併し、美の排除はなほ其の限界がある。何となれば凡ての實在は吾々には特殊として與へられ、理論人も此の特殊に於て關係せねばならぬからである。創造的想像なしには理論人も亦何事も出来ない。理論人も亦直覺を要するのである。この事は勿論異つた知識の領域に對して、全く異つた程度に於て考へられる。科學が正確計算から最も遠さかつて居る場合には、また個體が出發點であるのみならず、終局である場合には最も多く考へられる。夫故に歴史は常に藝術に境して居る。藝術家的構成力は常に歴史家のために大いなる職分を演ずる。如何となれば歴史家はなほ因果關聯に於て存立してゐる個々の完全なる像を歴史家の史料の中には決して發見しないで、却つて常に正當なる構成法を以て事

件間の間隙を満たし、また全く異りたる性質の精神的地盤に於て起れる行動、動機を改變して、私共に今日理解せられる時代描寫を創造せねばならぬからである。

經濟に對しては理論人は一般に無理解である。金錢及び所有慾が人間に於て重要な位置を占めてゐる場合には常に人間の情緒を燃やし、人間の客觀性を妨げ、他の活動に對して殆んど餘地を與へない。理論人の行績は金錢の價値を測定することに存しない。理論人は金錢のために働かないで、事物のために働く。理論人は研究と利得との結合を厭ふべきものとして見る見方、特に古代ギリシアに於て廣く廣まつてゐた見方に容易に到達する。理論人の心は富と贅澤とに戀著しない。實際的生活に對する興味は何れも皆理論人に缺けて居る。けれども經濟が全く缺けてはならぬ。自分の力の評價に於て、勞作の技術に於て、經濟的要素が存する。其の上理論人はその勞作に對して

圖書、器機、圖書館、研究所など——少くともその本質的部分に於て經濟界に屬する事物——が心要缺くべからざるものである。

理論人は社會的に統整せられたる人間には屬しない。理論人は研究調査の一般性、又は興味的一般性を血族の結束を超えて進めて行く。美的要素を保有して居る人間に對する純粹なる愉快は理論人には缺けて居る。人間は彼れにとりては觀察の對象であり、また研究の對象である。人間に對する理論人の態度は事物的客觀的である。故に大なる理論人は常に必ずしも大なる教師ではない。此の不一致のために、大學では時々苦しんで居る。理論人は事物に全く注意を集注するが、教授に望ましい程度に於て、事物を傳達すべき人間に没頭し得ない。夫故に研究者の職と教職との一致は困難として多くの人に感ぜられる。理論人は人間に於てと同様に事物に於ても主として一般性を見る。理論人は各事情を規則に歸しようとする、従つて理論人は各事情の特

殊の内容を汲み盡すことは決して出来ない。理論人の知識は彼れに力の感じ——此の感じがなければ凡ての力の要求もまた理論人には存せぬかも知れない——を與へる。理論人は此の感じを自然を認識する事によつて、彼れに對立してゐる自然を征服すべき人間の品位の命令として考へる。併し具體の場合に對して理論人はその力を適用することが出来ない。生活に知識を適用することに對しても亦理論人は大低反對する。批評と論争とは理論人の争闘形式である。併し、此の兩者を理論人は必ずしも常に尊重しない。組織は本質的には理論人に屬しない。却つて組織の際に征服せねばならぬ軋轢を理論人は惡む。政治生活に於て理論人は理解に訴ふる説明を重んずるに傾く。理論人は理論から出發する。その理論は——押し詰めて考へると——理論人を過激主義に導くに相違ない。それで理論人は政治的生活に適しない。理論人は多くの錯綜や、絶えざる變化や、同化又は和解の必要を看過する。一個の

人間は理論人には一定の文化の代表者、一定の國民の代表者として、はなく、寧ろ單に人間として見える。それで説明が人間の權利を明らかにするといふことが全く特色である。理論人は世界人である。國民間の最美、最深の差異は理論人のみが見る知に存せずして、感情や衝動に、想像や社會的意識に存する。

宗教に對しては種々の態度が可能である。宗教が全く否定せられ、古き時代の認識の一段階として放置せられるか、或は宗教を自然的に説明しようとする研究をする。即ち宗教を一定の主觀的體驗から導き出さうとする。特に恐怖と希望の體驗が常に論明に引出される——これが成功しても宗教の價値に關しては全く何も云はれないであらう。宗教に對してかゝる態度をとる人は實證主義的典型の人である。他の典型の人即ち形而上學者は認識の手段を以て最後の事實や問題にまで進入し得ると信ずる。即ち思想家が數世紀間研

究し、またスコラ學派の凡ての努力の大部分が費された神の證明の可能に關する問題も茲から出發する。形而上學者は獨斷家である。神祕主義に對してのみならず、内心の信心に對しても反對する。併し、方法的部分問題に固着せず、全體の描寫に對し、また凡ての部分の全體への統理に對して努力する。認識への凡ての眞實なる努力は宗教的衝動の内在に基づく。

理論人は自分の行動についても常に同一ならんことを求める。理論人は單に感情や氣分に依ることに打ち勝たうと求める。明瞭なる思慮に従つてのみ行動しようとする。情に動かされないで原理に従つて行動しようとする。主義は理論人行動の様式である。此の點からカントの範疇的命令が理解せられる。即ち人間は自分の行動の格言を常に一般法則として考へることが可能であるべきである。併し、カント自身が與へて居る例が既に狹量なることを示してゐる。實に他の事情のもとには此の原理は適用せられない、何となれ

ば合成的の事情は一般的の規定に持來せられないからである。狭い關係に於ては此の格言主義は容易に獨斷家をつくり、また術學者をつくることは種々の人についてまた種々の關係に於て觀察せられる。如何となれば此の典型は學問を職とするもののみに限られないからである。

## 第四章 美的生活形式

(Die ästhetische Lebensform)

藝術人に對する誤解——藝術人の世界——科學及び自然に對して——經濟に對して——人間に對して——政治に對して——宗教に對して——形式への意志

藝術人 (Der künstlerische Mensch) も亦一切のものが彼れに顯現する全く一定せる構造を有することが長い間誤解せられて居た。人間の多數は藝術家も亦此の世界を丁度彼等と同様に見もし、體驗もする。只藝術家は其の上になほ美しい言葉か或は何かの形式で彼れが見たものを表現する能を有してゐると考へてゐる。併し、かう考へれば凡ての藝術は或る度まで、或る技術的天賦

があれば學び得る技術にすぎないであらう。けれどもグンドルフ(Gundolf)が正當に述べてゐるやうに、此の考は肖像、詩などの複製者に對しては價值がある。併し、眞實の藝術家に對しては價值がない。「藝術家は疑もなく非藝術家―私共の世界に於ては凡ての階級の市民―と全く異つた範圍に於てまた全く異つた形式に於て體驗する。それで藝術家の體驗と其の體驗の表現―兩者は本質的には一つである―とは非藝術家によつては決して理解せられることが出来ない。一體に狹量人は一つの實在のみ即ち自分に特有な實在のみを認識するから、實在を追跡する場合には全く異つた實在の場合でも、なほ自己特有の實在を見出さうとするものである。』

美的要素は藝術家の中心に立つてゐる。藝術家は全く汲み盡さんと欲する具體物、個體、感覺的現象を目的とする。一般即ち合法への進路は藝術家には未知である。併し、特殊性、特有性に於ける現象は美的體驗に於てのみ汲

み盡される。此の世界との凡ての眞實の接觸は常に熱情的であるのに、美的體驗は常に利害を離れた體驗であるから、藝術家は熱望と行爲のみを覺醒する實在との直接の接觸を恐れる。藝術家の世界は私共が現實の世界を遁逃するために自らその中へ遁逃する想像の世界である。

科學は冷靜であり、また藝術家の内部の形式意志を豊富しないから、藝術家はこれを輕んずる。最もよく見ても反省は藝術家にとりては、彼が事物の完全なる直觀と個性とへ進み行く道程研究にすぎない。自然に對する藝術家の態度には特徴がある。自然は藝術家にとりては、認識せらる無精神的のものではなく、藝術家自身に内在すると同様な形式力が有力に働いてゐる有機體である。

經濟に對しては藝術家は恐らく理論人よりは更に理解がないであらう。經濟は生存の最も強い財産を形成するが、藝術家はこれに對して殆んど全く無

能である。或る大藝術家は殆んど實際に計算することすら出来なかつたと云はれて居る。私共が有益の範疇で働く場合には美は崩壊して仕舞ふ。夫故に美の凡ての理論がもし人間に對する美の有用の意味、美の本質的でない保養的な効果を見んと欲するならば美の理論は凡て失敗して仕舞ふ。美の價値は美の特有の標準を以てのみ測定せられる。けれども第二次的の行動としては經濟は必らず存する。即ち美に存する緊張と漸層とは精神物理的力的關係に順應せねばならぬからである。

美の本質に強い個性が存する。研究者の人格が研究の結果から除外せられるが、藝術品の中へ凡ての人格的勢力が投入せられる。感情移入の才幹は他の個人の上に自分を擴めて行く。人間の特殊性が藝術人の興味を惹く。従つて人間は藝術人にとりては美的體驗の對象となる。感情移入の藝術が此の場合に完全にまで高められ得る。藝術家は自分を他人に變形することを完全に

なしとげ得る、丁度偉大なる役者が最も完全にこれを爲し得るやうに。藝術人の社會的形式に關しては、ジムメルが之を劇と比較してゐるのは正當である。何となれば劇に於ては凡ては殆んど内容を除外し、只形式に歸するからである。即ち私共は人々が自らを表現する方法を享樂する。凡ての興味、特に凡ての深い社會的感情が除外せられ、只常に美的である形式に對する純粹な愉快が決定的である。愛の美的形式は戀愛であり、美に對する憧憬である。これをプラトーは曾つて見た美に對する回想であるとして説明して居る。此の愛は自己だけでも満足する。即ち相互の愛なくも満足する、『ウィルヘルム・マイシテル』にあるフィリネの『私が貴方を愛するとも、貴方には何の關係もないであらう』といふ言葉は、戀愛の或る形式の特徴を表はしてゐる。私には凡ての藝術は戀愛のみから生ずることを信じないが、戀愛は幾分か凡ての内の美的憧憬の中に包含せられてゐると信ずる。

藝術家に相應せる強き人格意識は、彼れに明確なる力感を與へる、尤も此の力感はずく特別な種類の力感であるが。藝術家は儘に他の人の上に、就中表現の力によつて、影響を及ぼさうと欲する。影響欲が表面に立つ場合には、藝術家の此の典型が政治的典型に移つて行く。疑もなく、非常に多くの、就中非常に多くの再生的藝術家は強い功名心と屢々藝術家の領域を越えて行く力と承認とへの強き努力とを有つてゐる。これは藝術家は此の場合には、彼れの創造に對して常に既に創造せられたるものを要するといふ事實と、また彼れの行績が非常に瞬間的であるといふ事實とが、恰も行績を出来るだけ高く評價して自ら同等者を創造せんと欲するがやうなものである。此の折々病的に高められる功名心を私共は特に俳優や管絃樂者に於て發見する。此の兩者は共に非常に高い度に於てその資料と關係してゐる。政治的生活はその争鬪と反對とを以て藝術家を引き付けるよりは寧ろ押し退ける。社會的勢力へ

の憑依、所與の形式への從屬は藝術家を不具にし、また抑壓する。藝術家の政治的理想は凡ての個性を承認し、また各個性に成長と發展とへの餘地を與へる自由主義である。

藝術家は如何なる體驗をも常に全く汲み盡さんと欲するから、常に宗教への傾向をもつてゐる。美が藝術家には最高の價值である。而して藝術家の宗教は美の宗教である。現世を貶黜する、現世と來世との、彼の粗暴なる二元論は藝術家にとりては堪へ得ないものである。

『堪能者にとりては此世界は啞ではない、

堪能者はしつかりと立つて、此の世界に於て自らを見る。』

此の世界は藝術家にとりては凡て魂を入れられたる形式であり、宇宙である。藝術家の宗教は萬有神教或は萬有心教（フェヒネル）である。シュライエルのマッヘルの宗教論に見えてゐる宗教は主として此の美的典型に屬する。『私共

の人格の嚴格に區切られたる輪廓が自ら擴大して自ら漸次無限の中に入り込むやうに宗教に於ては凡てが努力することゝを回想せよ。……人が有限の眞中に於て無限と一致し、各瞬間に於て永久となるといふことが宗教の不滅である。——生活が如何なるものであらうとも、生活は美である。困難も、熱心も、憂鬱も凡て私共には價值がある。「私共の遭遇するものは凡て痕跡を残し、凡て知らず識らず私共の陶冶に貢献する。」とゲーテが會つて云つてゐる。それで苦痛や、災難も亦醇化せられるやうに思はれる。

『神は凡てのもの、即ち無限を與へる、

神の愛してゐるもの凡てを、

凡ての歡喜と無限とを、

凡ての苦痛と無限とを見て。』

藝術家にとりては美は最後の精神完成であり、生活の特有の生活價值である。

それでバーナード・ショアの「岐路に立てる醫師」にあるデュベダットのやうに、藝術家の藝術は「死に行く美」に向ふことも出来る。

一般原理或は功利の熟慮が藝術家を決定しないで、形式への意志が決定する。此の意志の目的は固有の本質の自己實現であり、固有の人格の自己満足である。凡ての陶冶及び凡ての陶冶努力は疑もなく美的要素を有してゐる限り、美的價值の採用は陶冶に於ては内的形式に到達するための手段としてのみ感ぜられる。



## 第五章 經濟的生活形式

(Die ökonomische Lebensform)

經濟人の本質——知識に對して——藝術に對して——他人に對して——政治に對して——宗教に對して——經濟的生活と其の限界。

經濟人は (Der ökonomische Lebensform) 萬事萬物を單に實用の立場から測定する人である。經濟人は自分の行ふことを實用のために行ふのである。使用せられる力が期待せられる實用に對して正當なる關係に於てあるか、どうかを經濟人はあらゆる場合に商量する。經濟人は凡ての事物を事物の實利性に從つて判斷する。凡てが、他の人間ですら、經濟人にとりては生存存続の手段であり、また生存形成の手段である。併し、經濟人は必ずしも利得人 (Gewinn)

werbmann) たるを要しない。寧ろ實利の原理が經濟人の本質の最も多様の方面に透徹するを要する。經濟人特有の典型に於ては、經濟人は儲かに實業人 (Wirtschafts mensch) である。實業人の場合には經濟人は全く彼があるまゝの人として働き得る。何となれば實業人の場合には凡てが眞實に實利を目的とするからである。最小の手段を以て最大のものを得ること、出來事を凡て實利の見地の下に見て、特殊の意欲の範圍に手段として引込むこと、人間を利用すること、時と、材料と人間とを經濟的に利用すること、無目的のこと、無用のことを爲さゝること、右も左も見ないで、常に眞直に目的を追ふこと——これは明らかに經濟人の典型である。此の際には勞働者であらうが、企業家であらうが問ふ所ではない。尤も企業者の場合には經濟人の純粹な形式が一層明瞭に表はれる。何となれば企業者は生活し得んが爲めに金錢を得なければならぬといふことがないが、金錢のみが、財産のみが、彼れにとり

て終決であり、決定であるからである。凡てが、道德ですら經濟人にとりては勘定の對象となる。私は茲に典型的の實例としてベンヂャミン・フランクリンを引用する。氏は次のやうに云つてゐる。「時は金である。」「生活が大切であるならば、時を徒費するな、何となれば時は生活の實質であるから。」

「富者たらんと欲するならば、利得と同様に貯蓄が必要である。」「時も金も徒費しないで、常に兩者を最善に利用せよ。」此の經濟的性質が人間の各方面を非常に支配してゐることをベンヂャミン・フラクリンが正當に明瞭に表はしてゐる。

知識は經濟人によつて使用するためにのみ求められる。知識が實利を持來するか、技術的知識であつて始めて經濟人に價值がある。知識は經濟的利用を容易にすべきものである。亞米利加に於て最も完全に實現してゐるやうに、經濟人は彼れの目的に役立たせるために凡ての科學を求め、併し、科學の

利用には制限がある。科學の終る所に想像と信仰が始まる。私共が死せる資本の堆積に於てのみ仕事を見出すならばとにかく、然らざれば創造的直覺なくば何事も爲し得ない。

藝術と經濟とは遠く離れて立つてゐる。自然に於ける愉快を經濟人は知らない。自然は經濟人にとりては利得の對象である。經濟人は風景の破壊が彼れの目的のために望ましいならば、風景の美の如きは問題としない。藝術に對して經濟人は何等の理解もない。何となれば藝術は金錢に對して無關係であるからである。ハインリヒ・ハイネの叔父が、ハイネについて、もし彼れが立派な商人になるならば、書物を書く要はないといつてゐるが、これは明らかにこのことを云ひ表はしてゐる。經濟人の生活界に於て藝術尊重が表はれる場合には贅澤として起つて來る。一體生活が嚴肅になればなるほど、多くは想像の要求が益々強くなる。そして此の種の想像の要求が満足を求め

經濟人は實に利己主義者である。彼れにとりては自己保存が第一の問題である。何等直接の利益を得ない他人に何か與へる事は彼れの反對する所である。もし彼が何か他人に與へるならば、それは外的の地位のための勘定から起つて來る。人間について人間そのものが彼れに興味があるのではなく、人間の行績、人間の實利價値が彼れにとりて興味がある。テイラーシステムは此の性質を随分高めて居る。何となればギルグレスが明瞭な言葉で述べて居るやうに、テイラーシステムは人間を器械と同列に置くことを躊躇しないからである。經濟人は勘定の中へ契約者の道徳的性質をも入れる。最低の境遇から攀ち登つた亞米利加の大商人ハイイムボサムも矢張り、人が顧客に信用を得んと決心する前に、顧客の生活習慣、道徳觀、宗教觀の中に沈潛することを推奨してゐる。他の人に於ける興味は一般に經濟關係の時期を越えては繼續しない。

經濟人の政治的領域に對する關係は他の領域に對する關係よりは一層密接である。如何なる經濟人にも力衝動が潛んで居る。如何なる經濟人も他の人に打ち勝たうと努めるからである。競争なしには經濟生活は考へられない。特殊の行績に執着する競争を賞讃するのは經濟人の特徴である。如何なる企業者の性質にも力への努力が動いてゐる。實に此の努力が卓越するときには、政治的典型に移つて行く。經濟人が其の目的を實現するために政略を用ゐるやうになることは慥かである。私共がこれを利益政略といふのは全く不正當ではない。何となれば此の政略は經濟人の經濟的利益を有効にするための手段にすぎないからである。經濟人は經濟の豫想である政治的秩序の維持、財産の保護のために政略を要求する。國家は經濟生活の組織となる。經濟的生活のみが人間にとりて眞實であり、凡てを追ひ進め、凡てを支配するものであり、生活の最後の意味であり、内容であるやうに思はれる。此の點から凡

ての歴史は經濟の歴史であり、凡ての事は階級の争であるといふ社會主義の理論も理解せられる。

經濟的價值が最後であり、最高であり、世界を包括してゐる價值であるとして考へられる所では、經濟的價值は宗教的價值に移つて行く。此の場合には神はもはや愛に満ちた父として、はなく、富の主として、實利的才能の施與者として考へられる。人は神と約束して神に捧げ、神も彼れに與へんことを期待する。經濟と宗教觀とが相互に影響することは上述した所によれば殆んど更に詳細なる證明を要せぬ。金錢慾のみが利得への關係なく残るならば金錢そのものが神となり、拜金宗の本尊となる。かゝる宗教心の幾分かは如何なる經濟人にも存する。此の種の宗教心が凝結して迷信となるのである。

經濟人はフランクリンの實例が明らかに示してゐるやうに、實利のみを知つてゐる。實利は必ずしも快樂と一致しない。快樂であても、その實利が小で

あるために排除せられる。實利のために不愉快なものも採用せられる。實に經濟の動機として次の如き要求が考へられる。人間は生活し得んがために、また榮えんがために満足させねばならぬ種々の要求をもつてゐる。人間の努力は絶えず此の要求の満足にむけられる。此の際此の努力の目標は必ずしも決定的な個人的な實利ではなく、追ひ進める力として働く實利の理想である。個人的實利が職業興味の背後に財産生産の事實の背後に退く場合にも亦同様である。經濟人は直接に現實に食ひ入る。他の典型よりは多くの一層直接な關係を現實に對して有してゐる。經濟人はしかと二つの足で地上に立つてゐる人である。經濟人は理論人や藝術家が銘々の世界に生活して容易く彼等の足下にある眞實の地上を見失ふのであるが、かゝる人達を笑ふ人である。ウエルヘルム・マイシテルにあるウエルネルが或る度まで此の典型を表はしてゐる。ウエルネルがウエルヘルムに送つた手紙の中に次のやうに述べてゐる。

「此の際私が自分の利益を考へたことを貴君は諒として呉れるだらうね。」私が希望する、貴君の御父や御祖父さんの不生産的な嗜好について貴君が何等の御遺傳もないことを。貴君の御祖父さんは見榮えもしない藝術品などをうんと集めて、それを無上の樂みとして居られたが誰れ一人として、さうだ私が云ふがね、誰れ一人として御祖父さんと一緒にそれを娛めるものは居なかつた。また貴君の御父さんは家具家財に矢鱈に金をかけて生活して居られたが、誰れにも御自分と一緒に其の愉快を味ふことを許されなかつた。僕等はそんな方法とは違つた方法をとらうと思ふ。」「錢より外に何も要らない。錢があれば毎月好み次第な貴君の御氣に入る生活も出来る。……だから僕の氣に入る信條は外ではない。仕事に勵め。錢をとれ。家族のものと共に樂め。他の世間に對してはそれを利用の出来る範圍以外に頓着するなといふことである。」此等の文句の中に經濟的特性が明らかに表現せられてゐる。併し、吾

々は茲にも亦制限を發見する。此のことはウエルネルの手紙に對してウエルヘルムが反對したことで分る。經濟の世界は、世界の冷淡な、無趣味な一面である。目的と實利とによつて凡てが規定せられる世界である。聖化などのない世界である。

## 第六章 社會的生活形式

(Die soziale Lebensform)

社會人の本質——科學に對して——經濟に對して——藝術に對して——政治に對して——宗教に對して——社會的動機。

私共は社會人 (Der soziale Mensch) を經濟人の反對として考へることが出来るであらう。經濟人に際しては人間は全く目的の背後に入り込み、人間が一定の目的に役立つ限りに於てのみ價值と意味とをもつのであるが、社會人に於ては他人への愛情の背後に凡てが入り込んで行く。社會人の中には共同への熱望が存する。此の熱望は何等の目的も、何等の實利考慮も知らない。社會人は常に第一に他の人の上に向けられる。彼は全く他人なしには存在し得

ない、社會人の此の渴望が狭い範圍にのみ、一個人にのみ及ぶにしても、或は廣い範圍に擴張せられるにしても、それは問題ではない。共同は社會的典型的の生活要素である。共同が最高に完成すれば、共同の精神方向は愛である。愛する人は愛人の中に價值の保有者を見、また自分の満足を發見し、他の人の進歩の中に自分の生活の最後の價值を發見する。社會人は全く他人の中に入り込むことが出来る。全く他人の中に自らを失ひ得る。云はば他人の中に生活し、自分の價值を他人の鏡の中にのみ見出し得るのである。ウィルヘルム・マインテルにあるナタリエは愛情の人である。「私共はナタリエより高貴な人を見なかつた。彼女は最高の平和な心の持主であり、如何なる他人に對しても制限なく平等に働く心の持主であつた。彼女は常に働いて居た、如何なる仕事も彼女の手でなされたならば價值ある行動となつた。……ナタリエが私の筆筒や衣服戸棚を探索して居るときほど愛らしく見えたことはなかつ

た、彼女は私が用ゐてゐないものを常に見付け出し、その古着を切りもりして零落した小供に着せることを最大の幸福としてゐた。」ナタリエの全行動は彼れの性質の證明である。彼女は決して愛しないか或は絶えず愛するかであると自ら云つて居るのは正當である。何となれば凡てが他に對する相違に於て明らかに意識せられるが、彼女の全本質は愛情そのものだから、常に愛して居ながら殆んど愛情の感じを知らなかつたからである。

科學は社會人に何物も與へない。科學は事物的に、客觀的に振舞ふ。併し、社會人は他人を事物的に研究の對象として考察し得ない。客觀に熟達せる人にとりては他の人は常に只一つの場合にすぎない。事物に對して眞理であることは人間に對しても合法である。併し、合法は常に或る度まで一種の商量、一種の事物的冷靜、平靜なる判斷を豫想する。然るに愛情は殆んど合法ではない——愛情は盲目的であり、愛人の善と美とのみを見えしむる。勿論私共

は愛は觀察眼を開くとも云ふことが出来る。何となれば愛は愛する人に他の人の價值と可能價值とに對する眼を開くからである。愛する人は根據を追求しない。もし愛の正當を證明するために根據を求むるならば、愛は決して深みに入らないものである。他の人に關する眞理は屢々愛を破壊する。特に素朴的な人間に於てはさうである。これに反して發達したる人間に於ては他の人に關する眞理は愛情を深める。何となれば他人に關する眞理は缺點ある全人間を、愛する價值あるものとなすからである。社會的事情は人間を最も困難な事情に陥らしめる。病人は醫者に眞理を要求する。併し、醫者は眞理を患者に隠さねばならぬ——愛のために、それで醫者に厭ふべき假面と虚偽とがあり得るのである。愛人に愛する人の缺點に關する眼を開くことは愛する人にとりては辛いことである。併し、愛する人は愛人に疎遠となり、その愛を失ふ危険を犯して屢々此の途をとることがある。

經濟原理と社會原理とは最も強く相反して居る。經濟原理に於ては自己保存があり、社會原理に於ては自己犠牲がある。經濟原理に於ては實利がある、社會原理に於ては人間がある。愛は所有の問題にまで動いて行く事もある。それで脱慾は基督教に於てのみならず佛教に於ても僧侶を飾る美德となつて居る。愛する婦人が愛人に會ふために凡てを犠牲にすることもある。此の場合には經濟原理そのものが社會原理によつて如何様に左右せられるかが明らかに表はれる。もし愛する婦人が愛人の助けとなり得るか、或は愛兒を愛育し得るならば如何なる勞作にも、如何なる職業にも喜んで服する。此の根底がなくなれば勞働、満足してゐる勞働ですら喜んで放棄する。

社會人と藝術人との間にも亦一種の不和が成立する。人間が最も下等である場合には、また人間が最も悲惨であり、最も醜陋である場合には愉快と幸福とに光明を持來するために愛が必要である。基督は貧人や孤獨者を憫んだ。

眞實なる社會人は凡て皆貧人や孤獨者のために生活し、また働く。私共はロバート・オーウエンや、ペスタロチを想起する——彼等の仕事は貧人中の最貧者を目的としてゐた。愛のみが價値に對して精神を開かせ得る。愛のみが困窮を十分に温める事が出来る。愛する人は全く自らを忘れる。併し、戀愛詩人は決して自らを忘れない。戀愛詩人は常に自己享樂を求める。また愛に於て彼れの特有の自我の完成を努める。彼れはまた愛の中に美を求め、醜をすて、仕舞ふのである。

愛と力とは互に排斥しない。併し、社會人は愛の力のみを知る。彼れには家族制度が適合してゐる。家族制度に於ては愛する父が力を所有し、從屬者は主人の中に父を認めるのであるからである。愛のみが人間相互の關係を規定し得る。併し、此の規定には制限がある。社會が大きくなれば組織が必要となる。愛は商量を缺き勘定を缺くから此の組織に對しては無能である。組



織は常に單なる愛の社會からの脱出である。何となれば組織に於ては多くの意識的目的が存するからである。夫故に實際に於て人間の關係が廣くなればなるほど益々愛が負けて行かねばならぬ。組織は人間をあるがまゝに勘定せねばならぬ。併し、愛は人間が如何なるものであり得るか、また如何なるものであるべきかといふ風に見る。共產主義原理は各人が皆凡て他を眞實に愛する所に於てのみ常に可能であり、全く狭い範圍に於てのみ實現せられ得る。組織者に對しては目的の到達より高等な幸福がない。社會人は社會を得ようと努める、そして愛を欲求するのである。

社會的典型は他の何れの典型よりも宗教的典型に近い。社會人の中に生活が神聖になる根本性質が存する。世界的精神が愛の形に於て社會人に開く、そして此の精神が最高の人格によつて象徴される。此の人格の最高の力は愛である。愛する人によつて體驗せられるやうに、人間相互の關係は人間と神

との關係に移つて行く。神は父である。人間は神の子である。人間は互に兄弟である。

社會原理は常に何等かの内容に於て實現せられねばならぬ。所が如何なる動機が行動に影響したかは必ずしも常に明らかに認められない。他の人の靈の價値可能が凡ての内容價値の上に立ちて動機として働く場合にのみ私共が社會的動機といふことが出来よう。愛は凡ての行動の根柢となる事が出来る。内部の渴望として起り來る凡ての眞實なる教育的活動の根源も亦茲に存してゐることは茲に於てのみ暗示せられるのである。

## 第七章 政治的生活形式

(Die politische Lebensform)

政治人の本質と眞理——經濟に對して——藝術に對して——社會に對して——  
宗教に對して——力への意志

政治人 (Der politische Mensch) は力の人である。力が凡ての上であり、凡てが彼れの力への意志の用を務める人である。政治人は支配のために自然と人間とを知らねばならぬ。政治人の科學は技術である。政治人は技術を材料の上に限らないで、人間判斷と人間處理の技術をも求める。人間は政治人にとりては人形である、將棋の駒である。私共はこれを、遊戲と同様に、遊戲に勝つために此處彼處に正當に押し動かさねばならぬ。將棋盤上の凡ての駒の

やうに人間も亦凡て夫々の價值をもつてゐる。此の價值を私共は人間を計算するために知らねばならぬ。實際的に考ふること、人間の價值相當に考ふること——如何となれば人間は下等な凡俗であるから——賞讃や外的名聲に對する希望や、罰に對する恐怖を人間に投げ込むこと、相對して勝負事をすること、人間を夫々の地位に置いて使用すること、人間が用がなくなれば無遠慮に放棄することなどは力の人の要求する所である。力の人の道德は平和なる市民の道德ではない。力の人の政治的目的に役立つものは善である。獎勵的のものは眞理であり、害を與ふるものは非眞理である。力の人は結果が伴ふときには眞理を利用する。私共は人間を眞理で以て籠絡することが出来ねばならぬとはビスマルクによつて唱へられた格言である。虚偽と眞理とは政治人の力を擴張し、政治人に力と功名とを與へさへすれば同じものである。私共は更に一步を進めて純粹な力の人は眞理と虚偽とに對して、一般に何等

の器官をも持たないといふことが出来る。

政治的典型は他の凡ての領域に對して多少の内的の關係を有してゐる。經濟的領域は政治人にとりては手段である。富は政治人を自由にし、獨立にするのみならず、他人の精神の中へ有力なる誘動力の手段を投げ込み、他人の精神に影響を及ぼし自分の爲めに利用することを可能ならしめる。併し、經濟的勞作によつて此の手段を得ることは政治人に存せぬ。政治人のとる道は常に政治的手段である。政治的手段は鬭争に於ても、勝利に於ても、征服に於ても存するのみならず、談判に於ても、條約締結に於ても存する。近世の大企業家は強い強い政治的特色を有してゐる。

美は政治人の構造を整理する。凡ての力は華美を要する。力は華美によつて多數の被支配者よりも寧ろ力の所有者に影響する。絢爛たる服裝をして近寄る世界的支配者や、天蓋の下に進み寄る教長が華麗の中に特有の力を體驗

し、此の體驗から自己の特權や神の恵を感じ得る。また群衆は畏懼と驚歎とを感じる。教會や城の建物は單なる力の記號以上のものである。華美と美的體驗とは想像を喚起する。想像なくば政治に於ても大計畫は不可能である。併し、此の想像は地上に結び付いた想像であらねばならぬ。眞實の地を離れずして與へられた關係に結びついてゐなければならぬ。茲に政治と美との限界がある。力の人は決して純粹な美の形式に向はぬ。常に外的な影響の方へ向つて行く。

社會原理と政治原理とは一見甚だ矛盾するやうに見えるが、併し、社會原理は政治人の構造を整理する。何となれば支配するためには政治人は被支配者との結合を要する。此の結合なくば如何なる支配も永續せぬであらうからである。支配者は少くとも彼れが他の人のために働いてゐる、他の人の安寧幸福について責任があるといふ感じを持たねばならぬ。指導者の見解の純正

に關して何等の疑も起らぬならば、また指導者が被指導者を自分の野心ある計畫の手段として利用せぬならば、被指導者が指導者を承認し、自發的に悦服するやうになる。愛が指導者のものとなれば、指導者に役立つのみならず、また指導者から他の人の上に反影して行く。眞實と愛と信頼とは如何なる權力關係に於ても少くともどこかに現はれねばならぬ。

宗教に對して最も内的の關係が成立する。力が無限に高められ、また進められるならば全能の神の象徴にまで進んで行く。神は自分の意志を凡ての思考に對して、凡ての反對に對して押し進めて行く事が出来る。自分のために凡ての力を求むる力の人が再び最高の本質にたよることは誠に奇妙に見えるに相違ない。併し、力の人が自分の自由の限界及び特に自分の力の限界を認め、恐らくは自己の態度の非倫理、なさねばならぬ責任の重大を認め、其の結果力の人は或る度まで神にそれを轉するのであらう。茲に神祐が根ざして

居る。茲に正義の神徳の意識が根ざして居る。此の神徳はハムラード(Hammurabi)の時代以來今日まで知られて居る。神は實に世界の王である。此の世の國は必要なる現象であるが、神の國への前階にすばないのである。

政治人の動機は力への意志である。如何様にしてでも自らを完成し、また自らを主張する意志である。私共は互に權利關係に立つて居る。私共は政治に便利な所では約束をつくる。併し、政治上の必要が要求し、國家の利益が要求するならば、私共は其の約束を容易すくまた後悔もなく破る。併し、力はこれだけのものではない。中には強い倫理的要素、即ち最高價值への力が共存してゐる。政治に關する最後の判斷即ち歴史が遭遇する判斷は力と力の人とを常に文化の進歩に貢獻した程度を以て測定する。力の人は常に種々の可能、種々の手段を選択せねばならぬ。これは如何にせば自分の力が實現せられるか、如何なる目的に自分の力を用ゐるべきかといふことによつて定ま

る。力の人が自分の主觀的の價值感のみによつて決定し、外的の影響から自由であるならば、力の人は自分の本質から出る意志によつて決定する事が出来る。併し、價值を一定の價值系統に歸する價值法則に従つて決定することが出来ない。力は單に私共が欲することを爲し得、また欲し得る力を意味して居るのみではない。力にはもつと深い意味がある、力は私共が爲すべきことを爲し、また欲し得る力を意味して居る。此の内の力の力の上に、自己自身を超越したる力の上に存する力のみが眞の力であり、時代を通じて永續する力である。他を支配する道は自己支配を越えてのみ進んで行くのである。

## 第八章 宗教的生活形式

(Die religiöse Lebensform)

宗教人の本質——科學に對して——經濟に對して——藝術に對して——社會的領域に對して——政治に對して——自己の行動に對して。

宗教人 (Der religiöse Mensch) は常に眼を生活の全體にむけてゐる。總生活意義に對する自分の意義の中に經驗せられる體驗は凡て宗教的調子を帯びてゐる。私共は茲で先づ宗教心は全然懺悔心と一致せねばならぬやうに考へられて居る誤解に説き及ぶことが重要である。一定の懺悔に歸服し、神を信するが、神が居ないかの如くに生活し、時々神を想ひ起し、窃かに天國を望んで日曜に教會に行く人は決して宗教人ではない。天國に於いて何時か報酬を得ること

とを希望して、宗教の凡ての規定や、戒めを嚴に遵奉し、強制と感ずる規定や命令の強制に服従する人も宗教人ではない。宗教は靈の全く一定した存在である。私共が前に藝術について述べたときに、藝術は體驗の特有の形式を意味する事を力説した——藝術人は他の人と全く同様に體驗するが、但し其の上に表現能を持つてゐる人であるといふ一般に廣まつてゐる考に對して——のであるが、これは宗教についても考へられる。宗教人も亦世界に對する自己獨得の構造をもつてゐる。宗教人は獨得の方法で世界を見、世界を體驗する。宗教人が働いたり、楽しんだり、希望したり、恐れたり、喜んだり、悲しんだりするときに、これが凡て總體の色彩を帯んでゐる。個々の内容が生の總體に對する關係を有してゐる。此の特有の體驗方法、所謂宗教的アプリアリを表現することが重要である。ルドルフ・オットがこれを研究したが體驗を概念的に表現する困難が、彼れの場合にも亦明らかに表はれた。個々の方面のみ

が高まつて來る。私共が宗教人の構造を解釋しようとするならば、最後の價值へ、存在の總意義に進んで行く。宗教人の中に永久の深求があり、内的の不安があり、破滅の感じがあり、幸福と安全とに對する要求があり、平和と救済とに對する希望がある。かゝる緊張と、渴望の基礎の上のみ解放があり、解脱が可能である。併し、此の平靜と平和と幸福との打開は必ずしも常に必要ではない。人間は全生涯を通じて追求で押し通すことも出来る。そして純粹なる宗教人であることも出来る。恐らくはかゝる場合に眞實の宗教人があるであらう。併し、常にかゝる宗教人の渴望は、その生活の如何なるときにも最高價値の上に、又此の渴望の満足の上に進んで行く。宗教人の典型をゲーテのウイールヘルム・マインテル中にある美しき靈の告白の著者が代表してゐる。宗教的體驗は生活價値が生活の總價値に對して積極的關係に於て置かれるか、或は消極的關係に於て置かれるか、或は積極と消極

とを混合した關係に於て置かれるかに従つて三種の形式に於て表はれ得る。

此の宗教人の特有の存在に凡ての他の價值方向が從屬する。宗教人は獲得したる認識を除去することは出来ない。併し、科學は宗教人に最後の語を述べることが出来ない。宗教人の眞理概念は宗教人の宗教的存在によつて充たされる。中世の凡ての科學が教會の教へを支持する意義を有してゐた。教會の教へに反對するものは凡て非眞理とし、邪説として迫害せられた。これと同様にカトリック教は今日でもカトリック教の科學の爲めに奮闘してゐる。宗教人が研究の結果をばや除去することが出来ない場合には、これを信仰と和解せしめ、信仰價值の成就に利用しようとする。それで進化論を採用するが、併し、發展の事實の中に支配する神に對する不思議な證明を發見するやうになる。此の意識は科學的見識から生ずることが出来ない。最高價值として體驗する價值への信頼から生ずることが出来る。知は最後の語を保持

することが出来ない。知は決して個々の事實を超越せぬ。また決して價值に關して云ひ盡さないからである。宗教は價值體驗、價值要求から生ずる。科學は論理的、感覺的證據の確實性のみを知るにすぎない。

經濟的領域に對して種々の態度をとることが出来る。經濟的勞働は神への奉仕であるとして感ぜられ得る。また經濟的財は神の賜であるとして感ぜられ得るであらう。併し、經濟的勞働にしても、經濟的財にしても生活への手段にすぎない。また人間を全く充たして、生活の意義となるほどに人間を捕虜にはせぬであらう。此の點から經濟について二つの考へ方が可能となる。

一つは經濟的財の意味を否定する。貧乏と不幸とを信心の幸福として考へる——これが禁慾へ進んで行く。今一つは此の世の財寶は宗教的意味に適合すると考へる。カルヴィン教が經濟的勞働の成功に於て神の恵みの證據を見ると考へて居るが如きはこれである。

宗教人は凡ての單體を常に無限に關係せしめて見る。故に常に單體、有限を創造する藝術は宗教人の靈を満足せしめることが出来ない。併し、有限の藝術品に無限への關係が潜在する場合には藝術品は世界觀價值を有する。かくして美的體驗は宗教的體驗に擴まつて行く。偉大なる、優秀なる藝術は實に宗教的靈を歸依せしむることが出来る。併し、此の宗教的靈は云はゞ單なる歸依を固執するにすぎない。何となれば宗教的靈は感覺や模寫を啓示として理解することが出来ないからである。美は宗教に對しては常に只手段にすぎない、そして第二次的の行動として奉仕するにすぎない。美的體驗は宗發に對しては認識同様不十分なものである。宗教心の最後の神祕は凡ての構成に反對する。美的構成に對しても反對する。神は只平靜、沈黙の内部に發見せられ得るにすぎない。藝術による救済は宗教典型にとりては、一時的であり、暫有的であるにすぎない。藝術による救済は宗教の豫感を成長させるが、

宗教心そのものを成長させない。

宗教心は愛と最も密接に關係してゐる、他の靈の可能價值へ向ふといふ事實の中に既に宗教的特徴が潛んでゐる。そして如何なる眞實の生活共同も皆或る度まで常に一種の宗教的特質を帯んでゐる。共同に對する熱望は孤立を脱却する熱望である。併し、他の靈の可能價值のために他を愛する愛情のみが宗教的であり、利害に支配せられてゐる施與は宗教的ではない。強き共同的要求を有する人は或る意味に於て常に宗教人である。共同に對する要求は今日では宗教心に對する要求と同様に活潑である。宗教心は常に共同へ進んで行く。併し、如何なる愛情も皆制限を有する。私共は如何に他の人を憧憬しても、私共は如何に他の人と一致しても、私共は常に此の愛情の中に居る。私共が如何に他の人を理解しても、私共が如何に他の人に近づいても、他の人は常に他の人で對者である。それで如何なる大愛情も皆、最小に見つもつ



くも哀愁、失望の特徴を自ら帯びて居る。此の點から凡ての愛の欲望があるに係らず、地上の愛に對する斷念が生じ、神と共に隱遁する努力が生れて來る。宗教愛の形式は靈の保護である。他人の靈を解放し、宗教的價値に近づけるために、他の人を愛情を以て愛護することである。

政治的領域に對しては種々の態度が可能である。私共が全く小なるものと感じ、また全く神に依つて居るので、神の傍では無力であり、神に命ぜられ、神に行動せしめられるので、自ら行動するのではないと感ずるか、或は神の代理となつて不信者に對する戰を勝利に導く助けをなし、また宗教的價値の實現に努むるやう召集せられるやうに感ずる。これが最高の力にまで進んで行くことが出来る。私共が神のための戰に於て凡てを、此の世の凡ての暴力を征服するために召集せられて居るやうに感ずることが出来る。茲に制限があり、宗教的典型の人は茲から容易に政治的領域に入り込んで行く。純粹な

る內的の宗教心が關係する所では、此の宗教心が自分の心の中の神のみを認めるやうに進んで行く。實際の政治生活に於て宗教が食ひ入つてゐる。宗教戦争は單なる力の戦争以上のものであり、宗教戦争が實際に於て宗教的理念のための戰であつた。今日も宗教的助勢のない戦争は不可能である。國民の優秀なることを信ずることは常に強い宗教的特徴を帯んでゐる。祖國に對する愛情もまた或る度まで宗教的根源である。此の不可量物なくは今日と雖も何等の戦争もない。凡ての條約は宗教的根據を有してゐる。何となれば條約が維持せられるといふ信仰が條約者の間に疑もなく生きて居らねばならぬからである。私共は眞實と信仰について云々し、また條約を結ぶ式に神への祈願が證據として屬してゐるからである。併し國と宗教とが二つの力として相對してゐる。宗教的情意が國家と矛盾する所では宗教的情意は國家を決して最後の裁判所として認めることが出来ない。その結果は文化争闘である。こ

のことは歴史に於て屢々見られるのみならず、今日でも學校や宗教教育を脅かして居る。併し、國家が益々凡ての市民に同等の權利を與へ、少くとも原理に於て凡ての平等を認めるならば、疑もなく茲に強き宗教的動機が潛んでゐる。併し、宗教心が教會的宗教心として現はれ、教會が政治的勢力要素となつてゐるときには宗教心と國家とは敵意を以て對立する。國家は全く宗教には達せぬ。何となれば宗教に於て問題とする所は靈であり、國家に於て問題とする所は外的組織であり、また力の要求の整理統制であるからである。國家は靈については何等の力がない。國家は人に命ずることが出来るが、精神に命ずることが出来ない。教會は最高の意味に於ては人間を審問といふ外的な力的手段を以て支配する教會で決してあり得ない。此のことをドストエフスキーが驚嘆すべき大審問官物語に於てよく現はしてゐる。私共は信仰の共同によつて維持せられる無形の教會を考ふるも無理ではない。併し、實際

生活に於ては形式と組織とが必要であることを忘れてはならない。

宗教人は自己の行動に於ては最高として體驗せられた價值を條件としてゐる。宗教が動機として如何様に働くかは生活に對する宗教の態度に從つて種々である。即ち宗教が凡ての他の價值を否定するか肯定するか或は二元的な態度をとるかによつて異つて來る。凡ての他の價值を肯定する人は自分の力及び自分の行績能の外的の向上を體驗するであらう。自分の行動が大いなる確實性を得るであらう。彼は此の世を愉快に感ずる。また此の世に於て價值の實現を念とする。ゲーテが會つてエッケルマンに次のやうに云つてゐる。

『私は生涯中私をまた他の人を正直に考へた。また凡ての地上の活動に際して常に最高のものに眼を注いだ。他の人達もまた此の通りにした。働けば私共にとりて日が生れて來る。他の人に對しても日が輝いてゐる。他の人達は成功して、その光で私共をも照すであらう。かうして私共は將來を樂觀する。』

私共の祖國には多くの地方がある。私共の祖先は茲に愉快なる殖民地を開いてくれたのである。』かく生活の凡ての價値を樂天的に肯定することは結局最高の犠牲的精神にまで、實に地上の價値のために生活を犠牲にすることにまで進んで行く。——生活の價値を否定する態度は禁慾にまで進んで行く。凡ての運命的打撃、貧困、疾病などは人の反對することの出来ない神の攝理として考へられる。自分の靈の養護が唯一であり、最後であり、これによつて靈が神に近づく。祈は靈の養護の手段となる。禁慾者にとりては凡ての地上のものは第二次的のものである。彼れの故郷は神の國である。二元論者即ち生活の價値を肯定もしまた否定もする典型の人にとりては、個々の場合に、其の動機が天國から來るかどうか、また自分の靈の奥がら來るかどうかを決定せねばならぬ。かうして第一次的のものにのみ従つて行くのである。神と惡魔との間に戦があり、この戦闘舞臺が云はば人間の心である。二元的宗教人

は地上の生活を認め、地上生活の境界線を神の國と教會とに對して劃しようとする。彼は人間の眞實の共同生活は幸福の確實性のみから支配せられない。また教會は多くの社會的形式の唯一つにすぎない。決して凡て、ないことを認めるのである。

## 第九章 生活形式樹立の價值

生活形式論と生の哲學——人格了解の視點指示——生活形式論に對する二個の非難——人格と個性と

第三章より第八章までに述べた成人の生活形式論はエリッヒ・シュテルンがシュランガの生活形式論をうけつぎ、多少改造を加へて仕上げて居る生活形式論である(Erich Stern, *Einführung in die Pädagogik*, 1922, S. 163—203.)。普遍妥當の認識を對象とすると同時に自らも普遍妥當の認識たることを要求する學の哲學(Philosophie der Wissenschaft)を以て使命とするカント學派に對して不滿を抱き、學を以て生の一現象と見做し、一般に生の事實を了解することを哲學の主たる職分とするデイルタイやジムメルなどの生の哲學(Philosophie des Lebens)よりすれば、勢ひ生活形式論が生れて來なければならぬ。そしてこれによつて

生の具體化である人格の了解を企てることに到達せざるを得ない。普遍妥當の認識を求むる學の哲學よりするも、また價值と存在、形式と内容との相即融合する現實の生ける體驗を分析解明し、單に學の先驗的基礎のみならず、一切の精神生活の生ける内容を理解せんとするフッサール(E. Husserl)などの現象學(Phänomenologie)よりするも、生の哲學には不満足の點もあらう。従つて生活形式論にもなほ議すべき點もあらう。併し、生活形式論の狙ひ所は人間の人格を了解し得る視點を指示する點であり、かうして生の力の根本方向を指示する點である。私が生活形式論に興味を感じ、其の價值を承認するに吝ならざるは實に此の點である。私共は、日々生の力を具現して、生の力を伸長しつゝある兒童や生徒の教育者である以上、生の力の根本方向を了解し、此の視點より兒童や生徒を洞察して、兒童や生徒の生の力を遺憾なく助長するに努めねばならぬ。

併し、茲に生活形式論に對してあげられて居る二個の非難があることを述べて置かなければならぬ。第一の非難は上述せる如き生活形式は實際の生活に於て發見せられないといふことである。エリッヒ・シュテルンものべてあるやうに、『此の非難は事實起り得る。併し、かゝる非難を提起する人は此の生活形式樹立の意味を誤解して居る。生活形式は生の理想的の根本形式である。従つて此れ等の形式が生活に於て決して純粹に實現せられ得ないであらう。併し、生活形式論は總人格から出發し、その人格中にある形式を考慮し、その人格の本質に到達せんことを目的として居る。従つて具體的の人格について或る精神方向を優勢と定め、他の精神方向が如何にこれによつて整理統制せられるかを研究し、かうして種々の典型に到達したのである。』此の典型を視點として凡ての人格を眺むるときに、具體的人格の特殊が了解せられるのである。實際の生活に於て發見する如き像の描寫は生活形式の狙ひ所ではな

い。これは傳記の任とする所である。生活形式論は秀吉やナポレオンの生活の描寫を目的として居るのでない。秀吉やナポレオンの個性、人格の本質の了解を狙うて居るのである。

第二の非難は『かゝる生活形式は精神的に高等なる階級の人には價值があり、意味があるが、大多數の群衆には毫も適當しないといふことである。此の非難は群衆には一般に餘り目立つた人格がないといふことに歸する。群衆に於ては個人が他から目立たないことは事實である。併し、これは上述せる形式が群衆内には存しないといふことにはならない。尤も群衆中にはかゝる形式が十分に發達して居らないといふことが云はれるかも知れない。一體具體的の人格は常に内部から決定せられるのみならず、多數の外的の影響によつて形成せられるものである。時代精神、環境、體驗などは凡て人間の上に影響する。人間は實に輻合の生産である。或る階級に於て典型が餘り明瞭で

ないといふこと、或はその階級に於て典型が偏して居るといふことは一部分はかゝる外的の事實に其の根據を有してゐるのである。」

生活形式樹立の價値は人格了解の視點指示に存する。従つて上述の二つの非難は的をはずれて居ると云はなければならぬ。私共の人格は第一に内部から發展する、即ち私共の生の力は自發的に價値の世界に向つて進んで行く。或る個人は眞理價値の實現に、或る個人は藝術價値の實現に、或る個人は經濟價値の實現に向つて進んで行く。かうして其の個人の人格が伸びて行くのである。人格の特質は實に其の個人の内面的統一の中心が永久價値の實現に存するといふことである。生活形式は實に此の人格の本質を了解する視點を示すものである。此の人格の本質を了解するといふことはまた私共の個性の本質を了解することともなる。個性といふ言葉は個人の特殊性を意味してゐる。此の個人の特殊性は價値に關聯しない意味にも使用せられることもある。

が、私は個性を永久價値に向けられたる精神構造の特殊性の意味に解する。かく解するときは個性は個人の人格に外ならない。或る個人の人格は其の個人の個性である。従つて其の個人の個性の中心は永久價値に向つて居る。或る永久價値が或る個人の個性の中心をなして居る。勿論同じ理論人にしても千態萬様の趣を呈する。千態萬様の趣を呈するにしても、其の中心は眞理價値の實現に向つて居る。従つて磨けば磨くほど千態萬様の趣が光彩を發輝して來る。生活形式は實にかゝる個性の本質を了解する視點を示すものである。

## 第十章 兒童心理學の歴史的概観

哲學的兒童心理學——日記的觀察法——實驗的研究——要素心理學の見地——  
形態心理學——作品蒐集法と精神分析法

十八世紀の教育學的著作に於て私共は兒童の精神發達への多くの論及を發見する。ルソー (Rousseau) が兒童の自由なる發展を求め、凡ての抑壓の排除を主張して居ることは人のよく知る所である。このためにルソーは兒童の眞の自然を知らなければならなかつた。ペスタロチ (Pestalozzi) は教育は自然の發展に無條件に従はねばならぬことを信じた。それ故にペスタロチは兒童の自然の發展を熱心に追跡した。ヘルバルト (Herbart) に至つては教育の心理學的基礎の必要を力説した。フリーベル (Froebel) に至つては兒童の精神生活の特殊性をよほど精細に觀察してゐる。フリーベルは兒童の發達の時期を區切

つて居る。そして此の各時期の全體的特色を求めて居る。フリーベルの『人間教育』(Menschenziehung) (一八二七) は今もなほ少なからざる刺戟を興へる名著である。併し、ルソーにしても、ペスタロチにしても、ヘルバルトにしても、フリーベルにしても何れも皆一般心理學的基礎觀から出發して居る。兒童の科學的觀察はむしろ第二次的に考へられて居る。

ジギスムンド (Sigmund) は一八五六年に『兒童と世界』(Kind und Welt) と云ふ小著を公けにしてゐるが、此の頃に至つて自然科學の影響を受けて兒童の自然科學的研究が始まつて來た。ウィルヘルム・プライエル (Wilhelm Preyer) が『兒童の精神』(Die Seele des Kindes) を始めて公けにしたのは一八八二年であるが、今日もなほ一讀を價する好著である。プライエルの研究法は觀察法と記載法とである。氏は自分の息子の發達を誕生から滿三歳まで描寫したのである。氏の此の研究は多くの模倣者を出した。かうして日記方法 (Tage-

bu chmethode) が完成せられて居る。

兒童の日記的觀察法は實際に於て種々の制限に到達した。第一に兒童に對する精細なる理解が必要である。これがなければ實際に當りて價值あるものを正當に觀察記載することが困難である。第二に兒童が成長すれば其の生活範圍が廣まつて來て、到底純粹なる觀察のみでは追付かないやうになつて來る。茲に於て實驗法が導入せられて來た。一九二〇年に其の二版が公けにせられた クララ (Clara) とウィリアム・シュテルン (William Stern) の『幼兒の記憶と供述と虚言』(Erinnerung, Aussage und Lüge in der ersten Kindheit) の如きは此の方法によつたものである。これは自分の小供について實驗を行つたものである。併し、實驗の本質は可成多數の異なる個人を同一の條件の下に研究することに存する。ヴント (Wundt) が、る方法の理論的方法的基礎を創設した。モイマン (Meumann) に至つて實驗的心理學的方法を兒童時代に移し、實驗教育

學を基礎づけた。モイマンの大著『實驗教育學入門講義』(Vorlesungen zur Einführung in die experimentelle Pädagogik) 三卷は實に從來の教育學を覆へして、新しい正確なる基礎の上に教育學を打ち立てるであらうと思はしめた。

實驗法は實に自然科学の研究法である。十九世紀に於ける自然科学の驚くべき進歩は實に大部分は此の實驗法に負うて居る。所が此の實驗法は全く一定の豫想と結合して居る。實驗するためには研究機能を他の機能から分離し得なければならぬ。かゝる豫想は心理研究に於ては一般に殆んど實現せられ得ない。それで心理學に於てはヴントも云つてゐるやうに多くの場合に於て不完全なる實驗を以て満足せざるを得ない。併し、今日なほ多くの心理學者はかゝる自然科学的研究法に立脚して、精神生活を一系列の單純なる、もはや分解し能はざる成分即ち要素に分解し、此の要素から再び精神生活の複雑なる現象を組み立て得るといふ基礎觀に立つてゐる。かゝる基礎觀に立つてゐる



る心理學を要素心理學 (Elementarpsychologie) と稱することが出来る。此の要素の數、性質などについては今日なほ一定しない。併し、テオドル・チーヘンの『兒童の觀念聯合』(Theodor Ziehen, Die Ideenassoziation des Kindes) (一八九八) にしても ウイリアム・シュテルンの『幼兒の心理學』(William Stern, Psychologie der frühen Kindheit, 2. Aufl.) (一九二一) にしても ビーレルの『兒童の精神發達』(Bühler, Die geistige Entwicklung des Kindes, 3. Aufl.) (一九二二) にしても何れも本質的にはなほ此の見地に立つて居る。

實驗的研究法を以て心的現象を研究する際に不満足を感じることに、精神現象を要素に分解する際にも、また要素から全體を構成する際にも不満足を感じる點から終に心理研究に新しい方向が開かれて來た。此の研究方向は マクス・ウェルトハイマ (Max Wertheimer) の研究によつて刺戟せられて居る。此の新研究方向に屬する人々には ケーラ (Köhler)、コフカ (Koffka)、ゲルブ

(Gellb) などがある。彼等は エリッヒ・シュテルンも述べてゐるやうに、心的現象の原子化に反對して居る。彼等は要素は大なる抽象の産物であることを洞察して居る。意識の事實を建設する研究は個々の要素の結合によつて成功し得ないことを發見したのである。それで此の派の人達は心的形態から出發しようと企て、居る。即ち形態心理學 (Gestaltpsychologie) の地盤の上に立脚しようと企て、居るのである。コフカの研究方法には觀察と實驗の外に比較法が加はつて居る。これについては次章になほ述べるつもりである。

茲になほ他の兒童研究法について一言せねばならぬ。その一つは兒童の作品を集めて、これによつて兒童の心的現象を研究する蒐集法 (Sammelmethode) である。例へば小供の繪を幼時から成人に至るまで集めたり、或は一定の年齢の多數の小供の繪を集めたり、或は自由畫を集めたり、或は一定の題について描かれたる繪を集めたりする。今一つの方法は心的分析法 (Psychoanalyse)

である。これは本源的には精神的病的現象の取扱に對する方法として起つたものである。精神分析法によつて種々の心的現象は其の源を過去に有してゐることが發見せられ、また無意識が精神生活に如何なる役目を演ずるかが明らかにせられた。また性の本質と發達とについても價値に富む説明が試みられて居る。

## 第十一章 兒童心理學の新課題

自然科學的心理學と精神科學的心理學——人格の本質と精神の構造——兒童の意義と兒童心理學の新課題

精神の原子化に反對するコフカなどの形態心理學も純粹に自然科學の地盤の上に立つて居る。即ち形態心理學も亦自然科學たらんことを欲して居る。精神の特性がかゝる立場から十分に了解せられるであらうか。私共は單に人間の本質を自然本質として理解せんと欲するならば決して人間の本質に對して正當に評價せぬといふ見地に立つて居る。人間も勿論一面に於ては自然との關聯の中に存在して居る。従つて自然と同様の法則の下に置かれて居る。夫故に自然と同一の見地に從ひ、同一の方法を以て考察せられ得る。此の限りに於て自然科學的心理學は其の正當にして十分なる意義を有する。併し、

此の自然の存在が人間の存在を盡さない。人間は一般に自然を越えて自らを高めることが出来る。人間は私共が精神の王國として表はす王國に分前を有する。私共人間の生命を生活價值となすものは價值である。價值あつて始めて私共の生活に意義と内容と方向とが與へられる。大理石を以てつくられたる藝術品を見よ。またインクで紙上に書かれたる科學的業績を見よ。此等の印刷せられる紙や、彫刻せられなる大理石は作品の學科的或は藝術的内容を盡さぬ。寧ろ材料に編み込まれたるものが再び體驗の出来る個人の意識に達し込まねばならぬ。藝術や科學などは私共が文化財と稱して居るものであるが、凡ての文化財は人間によつて創造せられる。此の文化が人間の體驗中に入り込むことによつて始めて其の生命が維持せられる。藝術や科學などの如き文化形態を生産したり、或はかゝる文化形態を後から體驗することによつて了解する精神的行動を精神的作用と私共は稱して居る。精神的作用から出

て來る形態を精神の客觀化或は客觀的精神と稱する。精神が形態を自らから生ずることが出来ること。その形態は一旦生産せられたならば精神がら獨立に存し、其の存在を特有の法則に従つて導き得るといふことが人間の靈の本質に存する。藝術、科學、法律、道德、經濟などはかゝる形態の種類である。精神科學は此等の精神の客觀化の理解を取扱ふものである。此等の形態を生産したり、或は後から體驗しつゝ理解したりする精神作用を、自然科學的に指導せられる要素心理學と區別して精神科學的心理學として表はされ得る心理學が取扱ふのである。此の心理學は文化形態へ常に入り込まなければならぬ。此の心理學は精神作用を最後の要素にまで還元することを狙はないで、常に意味の平面に立ち留つて居る。

心理學の中心問題は人間の人格の問題に歸着する。要素心理學は人格の問題には成功しなかつた。これは科學がなほ發達しないためではなく、此の心

理學の態度が人格の問題には近寄れないためである。一體人格の本質は價值體驗に存する。人格は精神的本質である。それ故に單純なる意味のない要素から人格の全體を建設することは不可能である。エチュアルト・シュプランガが汝が誰れと交際するかを云へ、さうすれば汝は如何なる人であるかを云はうといふ古語を、汝に價值あるものを云へ、汝が汝の生活の最高の價值として體驗するものを云へ、さうすれば汝は如何なる人であるかを云はうといふ風に變更することが今や正當であると云つて居るやうに、實に人格の中心は價值體驗に存する。如何なる價值が最高として、生活を決定し、生活に意味を與ふる價值として體驗せられるかによつて人格の生活が、全く變つて構成せられる。實に人格の差異は價值體驗の差異に歸せられる。私共は六つの可能價值方向を前にのべた。現實の人格に於ては凡ての可能價值方向が存して居る。併し、或る價值方向が特別の強さを有し、主として生活を決定するのが

普通である。かうして私共は各個人に於て價值性向の全く特別なる方向と成分とを見出すのである。これが私共の精神の構造として表はすものである。此の精神的靈構造の下に私共は體驗性向及び行爲性向の完結せる關聯を了解するのである。此の關聯は價值方向によつて組織せられて居るが、其の中心點は銘々が體驗し得る價值統一の中心點である。何れかの價值が個人の價值方向の中心となり、價值統一の中心となる。故に前にあげた理論人、藝術家、經濟人、社會人、政治家、宗教人の六つの根本形式が人格の中心となり、個性の中心となり、個人の生活が進動する形式となる。故に此等の典型的根本形式は人格の根本形式であり、個性の根本形式であり、生活の根本形式であると見られる。勿論これによつて具體的人格の豊富と多様とを描寫することは出来ない。併し、此の見地に立つて始めて私共は人間の精神生活の豊富と多様とを指示することも出来るし、亦了解することも出来るのである。

卵から出た小雛は直に穀物を拾ひとり、自分の營養を求めることが出来る。成長するために雌鶏の監督の下に久しく居るを要しない。哺乳動物は早くから獨立して生存することが出来る。短い間だけ成熟者の養護を要するにすぎない。然るに人間に至つては、成長を遂げるために約二十年間を要する。然らざれば一般に十分なる成熟に到達することが出来ない。此の永い生活時期は廣い意味に於て兒童期と稱せられる。かゝる長期——人間に特有なる——の兒童期は人間にとりて如何なる意味があるか。鳥類にしても、哺乳類にしても多くは生得的の本能に従つて生活し成長する。本能は外界によつてつくられるものではない、外界はむしろ本能を只釋放するにすぎない。生物が確定的な本能に従つて生活する場合には大いなる發達も伸展もない。かゝる所では學習がない。併し、決定的の特徴をあまり有しないが外界の影響のもとに變化し發展し得る多くの素質を有する個體は發展の見地よりすれば有利な

地位にある。かゝる種類の生物は個體的生活の間に多くのことを學習することが出来る。此の意味に於てコフカは其の著『心的發達の基礎』(Die Grundlagen der psychischen Entwicklung) (一九二一) に於て兒童を學習の時期として表はしてゐる。最高に發展した生物を下等生物から區別する最高の行績には學習が必要である。凡ての一義的に決定せられたる素質は一義的の決定的の行績のみを可能にする。本質的には決定的な特徴を規定する個體は生活に於て殆んど新しいものを得る状態に居らない。これに反して素質が前から種族的に決定して居らないで個體的生活の間に始めて建設せられる所では行績の發展する範圍が廣い。生物は變化し得る素質を有することによつて高き發達が可能となる。茲に學習の根據がある。併し、茲で高き發達と云ふことは如何なることであらうか。人間の身體の構造は他の動物よりも複雑である。併しこの故を以て人間を高き發達をして居ると云ひ得るであらうか。これは凡

て人間を自然本質として考へて居るのである。自然に於てはそこに差別があるのみである。高いとか低いとかといふことはない。高いとか低いとかといふことは價值判斷である。價值判斷は只體驗する意識にとりてのみ意味を有つて居る。人間を動物から根本的に區別するものは人間の身體の構造ではない。人間の有機體が他の動物よりも複雑につくられてゐるといふことではない。また人間は精神生活をもつてゐるといふ事實でもない、何となれば動物も精神生活をもつてゐるからである。凡てこれらは人間は自然本質であるといふことを表はすにすぎない。自然本質としての人間には私共は自然科学的方法による考察によつて近づくことが出来る。併し、人間の自然存在に於て人間の本質は決して盡されない。それで此の考察は十分ではない。私共は寧ろ人間を精神的本質として理解せねばならぬ。人間をかゝるものとして研究の對象となさねばならぬ。この意味に於て人間の兒童期の意味が始めて明ら

かになるであらう。私共が満足なる見解に達せんと欲するならば、人間の人格の本質に關する私共の根本見解から出發せねばならぬ。これを私共は價值に於て見たのである。即ち精神の構造に於て見たのである。かゝる精神の構造を有するが故に人間は精神の王國を有するのである。人間の故郷は實にこの精神の王國である。動物はかゝる精神の構造を有しないといふことが人間の精神と動物の精神との區別點である。動物はかゝる精神の構造がないから、如何なる動物も文化を建設することが出来ないのである。自然存在に於ては直接の生活要求の満足に於て動物的生活が盡きる。これに反して人間は文化の創造者である。そしてこれと最も内的に關聯したる歴史を人間のみが有つてゐる。動物に於ては、動物の個體的生活が同様に常に始めから始めねばならぬ。前の時代の獲得から何物も譲り渡されない。然るに人間に於ては此の世に出現するとき全文化を見出すのである。この文化を人間は收得し得る

のである。人間はかうして全人間の勞作を採用し、また更に其の勞作を進めて行く状態にある。これが始めから人間に與へられてあることは不可能であり、考へられないことである。永くかゝつて漸やく人間が精神の王國に於て其の分前を得ねばならぬ。かゝる間に價值生活が人間の中に成長し、自らを建設して行く。かうして精神構造が發展して行く。人間は精神の本質であるから、人間は精神的内容を採用せねばならぬから、人間の精神の構造がかくしてのみ發達し得るのであるから、人間は永い／＼兒童期を有するのである。人間は實に既に存する文化形態の中に於てのみ自ら發展する。人間が既存の文化を採用する間に、既存の文化が人間の靈に影響する間に、人間の精神が形式と構成とを顯現するのである。個人が文化財を受容する間に、自分の精神構造を建設して行く。かうして人間は常に價值の體驗、價值の構成が出来るやうにせられるのである。文化財の受容は個人が文化財を所有するといふ

目的のみを有たないで、個人の精神が文化財に於て自らを建設するといふ目的をも有して居る。文化財を受容して精神を、精神に特有にして然かも外界からの影響を受けた形式にまで陶冶する過程に兒童期が役立つのである。兒童期の意義は此の時期に於て文化財の受容が行はれ、精神の構造が開展せられて價值の體驗と構成とがなされ得るやうに人間が伸長して行くことに存する。茲から兒童心理學の新課題が生ずる。今までの兒童心理學は本質的には個々の機能の發達を別々に研究することを職としてゐた。従つて知覺、言語、繪畫、想像、感情生活などの發達が取扱はれたのである。私共はこれらの研究を決して等閑にせぬ。併し、兒童心理學はこれで盡きることが出来ない。私共が第一に知らんと欲することは寧ろ、如何に精神の構造が發達するか、如何なる階段を経て精神の構造が、私共が成熟せる人格に際して示し得る形式にまで進展するかといふことである。カール・ビーレルが一九一九年に公

にしてゐる『兒童の精神發達綱要』(Karl Bühler, Abriss der geistigen Entwicklung des Kindes)の如きは此の立場から見ても一讀の價値がある。

## 第十二章 精神發達の條件

輻合原理——陶冶性——教育

人間は完成者として此の世に生れて來ない。永い發達を經過して進んで行く。此の發達の條件が理論的にも實際的にも大いなる意味を有する。此の發達の條件に關して古くから對立した二つの見解がある。一つは天性説であり、一つは經驗説である。天性説は人間の性格のみならず、結局全精神生活も亦生得的素質から生ずるといふ見解を代表して居る。經驗説は凡ての精神現象及び凡ての行績を人間に及ぼす外界の影響から説明せんと欲する見解である。性格と素質とが生得的であり、これから凡ての行績及び文化が生ずるといふ天性説は全部眞理であるとは云はれない。勿論私共は各人から天才をつくることも、各人に特有な精神態度を本質的に變ずることも不可能であることを



今日ではもはや疑ふことが出来ない。生得的の素質も特徴も存することはもはや疑はれない。一定の素質を全く等閑に附するに係らず、これが後に打開するといふ場合のあることも疑もなく正しい。併し、外界が大いなる影響を與ふることも亦疑ふことが出来ない。私共は一定の環境が如何に人間を衰頽に導き得るか、また如何に同一人が環境の影響を取り去ることによつて變化するかを見て居る。勿論外的の關係のみが決定的であれば、同一の外的條件のもとに成長する人間は双兒のやうに、其の發達に於て大いなる一致を表はさねばならぬ。併し、外的には同等であつても內的には非常に異なり、時には全く著しい差をあらはす。併し、外的の關係が全く何ものをも意味せぬならば教育は一般に何等の目的をも有たぬ。何となれば凡て何事もならねばならぬやうになるのであつて、私共は出來事の流れを早めることも妨げることもないからである。併し、教育は凡てを成就しないが、多くを成就する

ことは經驗の教ふる所である。されば天性説のみも、經驗説のみも正當ではない。眞理は二つの見解の結合に存する。人間は個人に生得的に存する要因と外界から來る影響との共同作用によつて伸長發展するものと見なければならぬ。此の共同作用をウイリアム・シュテルンは輻合原理(Des Konvergenzprinzip)と稱して居る。

私共は人間は全然先天的でもなくまた全然後天的でもない。先天性と後天性との融合であるといふ見地に立つて居る。勿論此の融合の工合は時と場合とによつて異なる。或は先天性が勝ることもあれば或は後天性が勝ることもある。人間の先天性及び後天性に關する今日までの研究は殆んど皆個々の素質に限られて居た。構造素質については考へられなかつた。構造素質についても疑もなく先天性と後天性とが共同に働く。併し此の際には先天性が優勢であるやうにも思はれる。精神的個性の芽に於て人格的價值構造がどこまで

準備せられるか、人格的價值精神が環境の力によつてどこまで形成せられるかは個人の歴史的觀察と比較とのみが説明することが出来る。經驗は實に此の兩面性を證明する。社會的狀態、日々の職業、主要なる社會の見解などが非常に強く個人を決定することは經驗の示す所である。個人は此等の力の總影響によつてつくられる。併し、生活の構成に對する決定的の形式は人間自身に存してゐる。構造が生活の印象や經驗によつて或る意味に於て變化せられるが、準備せられたる構造の受容には變化がないとはシュプランガなどの力説する所である。

私共人間に存する素質は自ら變化し、發展し、構造する能を有して居る。此の能を私共は陶冶性 (Bildsamkeit) と呼んで居る。此の陶冶性の本質は如何なるものであらうか。私共は材料に或る形態を與へ得るならば、此の材料を陶冶せられ得ると稱する。大理石像に於て私共は材料と藝術的形態とを區別

する。藝術的形態は材料からは生ぜぬ。むしろ外から創造的藝術家によつて材料に與へられる。形式と、形式がつくられる材料とは全く異なる世界から生ずる。材料と形式とは只表面的に外的に結合してゐるにすぎない。このことは鑲についても眞鍮についても考へられる。私共が道具を有し、道具を使用する方法を知るならば、金屬から凡ての種類の對象をつくることが出来る。如何なるものがつくられるかは人間の精神が決定するので材料が決定しない。かゝる場合には陶冶性は材料が形成の材料となり得るといふことを意味して居る。かゝる場合には材料の陶冶性には原則として制限がない。私共は任意の形を材料に與へることが出来る。

併し、有機的生命即ち植物や動物になると陶冶性の意味はどうなるであらうか。植物や動物になると凡ての可能性は芽に於て一義的に決定せられて居る。此の芽が發展する場合に一般には凡ての境遇の下に於て此の決定せられ

たる種類の本質が發展する。園丁や御者が爲し得る凡てのことは最も都合よき生命條件に對して注意するといふことだけである。これによつて種子が一層豊かに有力に發展し得るのであるが、此の際に問題となることは常に程度の差異で本質の差異ではない。植物や動物は生命に作用する材料を外からとらねばならぬ。植物や動物は外界から營養材料をとり、これによつて其の體を建設する。併し、此の採用せられたる材料が如何なるものにつくりあげられるかは全く生物の組織が一義的に決定する。即ち各植物の種、各動物の種は夫々種に獨特の蛋白質をつくるのである。生れつきの犯罪者についてのロムプロソの説や、性格の不變についてのショペンハウエルの意見は、かゝる見解を人間の上に移さうと試みたものである。併し、かゝる見解を人間の上に移すことは誤りでなからうか。外的の影響によつて人間は随分異つて成長し得るではないか。貴族階級は多く政治家、外交官、將校等を供給する階級

であるが、かゝる貴族が政治的生活形式に屬するならば、自分の道を見出し、一定の道を開いて行く。此の道が彼れの力を伸ばして行く。併し、同様の精神構造の人が下層階級から起るならば、頑強なる社會的秩序が國の事務への道を彼れに否定する。彼れの力は現存せる事情に對する無益の反抗のために焼き盡され、かゝる争の中に丕んで伸びて行く。人間が其の生活形式に都合よき環境に生長する所では、即ち人間が其の形式素質が發達し得るために要する陶冶材料を使用し得る所では、人間は自己完成にまで、價値に充ちた行績にまで伸びて行く。かうして満足と幸福とを見出す。これに反して外的の條件が不利な所では十分なる發達には到達せぬ。併し、如何に異つた領域に於ても根元的の素質は結局發展し、打開して來る。經濟型の人が政治家になつても、結局經濟型の特有の性格を帯びるやうに思はれる。

一體凡ての文化價値は人間によつて創造せられるものである。創造せられ

る凡ての價値は先づ第一に創造者に體驗として與へられる。實に或る度までは價値は人間の精神の構造が採用した體驗に外ならない。夫故に創造者の精神の構造と創造せられる價値の構造との間には内的の一致があらねばならぬ。宗教的に體驗する人間は宗教の領域に於て優秀なる價値を實現し得る。何となれば彼れの全體験は宗教的として與へられる。而して彼れによつて創造せられたる文化形態は此の體驗の沈澱に外ならないからである。

人間の體驗が人間内に置かれたる價値態度によつて決定せられ、人間が凡てを此の態度によつて見ることが出来るならば、人間が價値に於て採用することは此の價値態度によつて條件づけられて居らねばならぬ。實にこれは個人の精神構造に全くか或は一部分適してゐる文化財が一般に人間に影響することが出来るといふことを證明するものである。これは既にケルシエンシュタイナーが一九一六年に公けにした『教化過程の根本公理と其の學校組織に對

する推論』(Das Grundaxiom des Bildungsprozesses und seine Folgerungen für die Schulorganisation)に於て力説して居る所である。併し、精神構造は人間に於て完成しては與へられてゐない。只企てられてゐるのみである。従つて自ら發展せねばならぬ。併し、其の發展は儲に人間が既に創造せられてある價値形態を採用する仕方によつてのみ可能である。この場合にのみ精神に企てられてある形式が發展し得るのである。精神が發展し得る價値を陶冶價値といふならば、人間の銘々の精神構造と完全に一致する文化財が個人にとりて最高の陶冶價値があると云ふことが出来る。其の構造が精神構造と一般に何等の一致をも示さない文化財は陶冶價値がないと云はねばならぬ。所が各個人は他の個人と區別せられる。何等の精神構造も他の構造とは同一ではない。従つて何等の文化財も同一の構造を表はさないと見なければならぬ。併し、他の方面より見れば人間の銘々の精神作用に於ても、また各文化財に於ても凡ての他の

價值適當性が包含せられて居ると見ることが出来る。故に全く同一のものもなければまた全く異りたるものもない。凡ての多様な文化財を個人に對する陶冶價值に従つて一列に排列すれば此の兩端の間に這入つて仕舞ふ。

動物は採用する物質を先づ分解せねばならぬ。分解した産物から自己獨特の身體物質を建設せねばならぬ。然るに文化財の場合に於てはこれが異つた趣を呈するやうに思はれる。文化財は採用せられる際に主觀的體驗に變化し歸着せしめられるが、其の本質は變らぬ。文化財が採用せられたる精神によつて新たに形成せられ、建設せられる。故に文化財は植物の營養材料と同様の方法で同化せられないやうに思はれる。如何なる土地に成長するも植物にとりては或る範圍に於ては全く同様である。植物は異つた種類の營養材料から同様の身體實質をつくる。完成したる植物から、如何なる材料が植物の營養に役立つかはもはや分らぬ。然るに價值形態が精神に入り込む場合にはこ

れと同様の度にて分解せられない。常に形成せられたる精神から、其れをつくつた内容が分る。識者は或る度まで個性の上に影響したものを識る。外的の文化財の凡ての採用は常に形式を自らに有する精神の陶冶に役立つ。陶冶性を此の見地から見れば精神の中に圍まれてある形式、精神の中に存する素質を發展するもののみを欲求する。陶冶性は自己實現、自己の本質の實現より外的のものであり得ない。勿論此の形式の具體的形成は外界影響と相關してゐる。陶冶を知識の意に解してはならぬ。知識を有するも陶冶せられてゐない人もある。知識が貧弱でも陶冶のある人もある。知識は人間の有するものであるが、陶冶は精神内に存する形式の十分なる發展である。以上の論述によつて陶冶性の概念が漸次詳細に決定せられて來る。精神は二重の見地に於て陶冶的であるやうに見える。精神は一面に於ては一列の階段を通過して發展するが、此の發展は精神の中に存する形式の發展である。他の一方より

見れば外界が此の發展過程の上に影響する。私共は外界なくしては存在することが出来ない。外界の影響の下に於てのみ精神は形式と形態とを顯現するのである。此の兩要素を綜合するならば、陶冶性は精神客觀即ち文化財に於て自らを建設し、精神の構造を益々精神客觀即ち文化財に於て發展する個人精神の能である。人間の精神は個人の中に存する目的への瞥見に於てのみ陶冶的である。ゲオルグ・ジムメルが、精神は各瞬間に於て以前よりも増して居る。何となれば、精神は精神生活の各瞬間に於て自らを越えて自分の中に帯びてゐる目的の上へ指示して居るからといふことを力説した限り正當である。實に私共の精神は自らの中に存する發達法則によつて、一列の階段を通つて伸びて行く。個々の部分素質も亦孤立しては意味をなさぬ。個々の素質は精神的總構造の中に入れられ、この總構造によつて形成せられ、此の總構造の框の中に於て意味と重要さとを有する。茲に始めて各個々の機能が一定

の課題に適して來るのである。私共は個々の機能も亦總構造の框の中に於て、決定意味への方向に於て、改造せられ得るときに陶冶的と稱するのである。

私共は既に材料は原則として無制限的に陶冶的であるが、動物と植物とは其の有機的身體的發達に於て、一義的に決定せられて居ることを力説した。此の兩極の間に或る度まで人間が立つて居る。人間は材料ほどに自由に陶冶的ではない。植物などのやうに一義的に決定して居らぬ。凡ての物質は只形成の材料である。その形は創造する藝術家の精神——或は手藝家の精神——から生ずる。併し、人間の精神は既にそれ自身に形式を擔うて居る——この形式が只發展するのみと考へられる。存する形式が只發展にまで來り得るにすぎないならば、教育が一般に意義と重要さとを有し得るかどうかといふ問題が起り得る。併し、精神に於ける形式は只素質にすぎない。外的要因の影響の下に始めて發展する。人間に外から文化財が供給せられなければ形式素質

は開展に達し得ない。併し、凡ての文化財は同様に各人にとりて陶冶財として考へられない。個人の精神構造と文化財の構造との間に少くとも部分的の一致が成立せねばならぬ。各人に凡ての精神作用が與へられて居り、凡ての價值方向が各人に企てられて居る。それで如何なる價值方向も全く等閑にせられてはならぬ。むしろ各方向が發展に必要である。文化財の多數が人間に對して立つてゐる。併し、陶冶財としては凡てが考へられない。選擇が茲に行はれねばならぬ。兒童や生徒が陶冶せらるべき價值を私共が選擇することが出来るから私共が特有の意味に於て教育と稱する他人陶冶が可能となる。選擇が一般の價值見地から——結局世界觀から——また生徒の精神によつて決定せられねばならぬ。教育は兩方に注意せねばならぬ。精神構造と文化財とがこれである。一方では文化財を保存し、傳達することが考へられる。他方では兒童の精神が文化財に於て自らを建設し、發展すべきである。かうして

價值の體驗にまで、價值の創造にまで進んで行く。

精神構造によつてまた兒童の個々の素質の特性によつて陶冶性に境界が置かれる。構造と個々の素質によつて與へられる境界以内に於てのみ陶冶と教育が一般に可能である。併し、此の境界には廣い活動の餘地がある。云はゞ一般の框のみが與へられ、描法が示されてあるにすぎない。これが實現せられるか否かは外界の影響による。これが教育の可能を示すのである。教育は兒童に對して陶冶價值であり、兒童の精神がこれに於て生長し、發展し得る價值形態を供給することが出来る。併し、價值が作用すべきときに最も生々した形式に於て兒童に供給せられねばならぬ。凝固せる、兒童に反對して立つてゐる形態として、はなく、兒童の生命が燃へ立つべき生命として供給せられねばならぬ。他の語を以て云へば價值は價值にみちた教育者の精神から兒童の精神に流されねばならぬ。これは教育の可能を示すのみならず、教育

の必要をも示すものである。

天才は凡ての環境の下に、最も都合の悪い外的關係の下に於てすら伸びて行くと言はれるが、これは正當ではない。根本的の素質が非常に力強く、精力と意志とが非常に強く、ために大なる困難をも征服することがある。併し一般にはさうではない。外的の關係が不都合であれば、即ち凡ての眞實に適當なる陶冶價値が缺けてゐる所では十分なる發展が抑壓せられる。されば人間が發展に要する條件を發見せねばならぬ。教育は可能であり必要であるのみならず、義務である。

精神は發展に際して種々の段階を経て行く。精神の陶冶性は各階段に於て同様に大ではない。兒童期は陶冶の時である。私共が體驗したこと、採用したことは凡て精神に大なる決定性を與へる。人間はその精神が陶冶的である限り教育せられる。故に兒童期は人間が教育せられねばならぬ生活の時期である。

ある。此の時期に教育が等閑にせられたならば、後になつて殆んど取り返しがつかない。



### 第十三章 兒童前期の生活形式

(Die Lebensform der frühen Kindheit)

兒童と成人との相異——發達階段の特殊性——發達階段の區分——如何にして兒童の世界を理解するか——兒童時代の回想——比較心理學——民族心理學——兒童の内的現象と外的現象の融合——原始人の事物に對する態度——兒童の事物に對する態度——自我と世界との統一——未發展統一の階段——遊戯——兒童期は幸福の時期

私共は種々の生活階段を経て伸びて行く。此の個々の生活階段に存する差異は本質的には量的である、兒童の精神は成人の精神と同様に構成せられて居る、只兒童の場合には凡ての特徴が甚だ不明瞭であり、未決定であるにすぎないといふ見解が一般に廣く理解せられて居る。此の見解によれば凡ての發達は量的増加にすぎない。併し、身體の發達について見ても此の見解は十分ではない。兒童の身體は成人の身體と量に於て異なるのみで、其の形式が兩者に於て著しく異つてゐる。例へば兒童の頭の割合は成人の頭の割合と比較して非常に大である。また内分泌腺の如きも兒童の場合には成人の場合と異つた方法で作用するやうに見える。故に兒童の身體は成人の身體と異つた特質を有する云ふことが出来る。

精神の發達に關しても同様に兒童と成人とは異つた特質を有すると見る方が正當であるやうに見える。兒童と成人とは本質的に同一であると見る見解の下には兒童の特質は決して理解せられない。ゲーテがエッケルマンに次のやうに云つてゐる。「人間が經過せねばならぬ異つた階段がある。此の各階段には夫々特有の性質がある。此等の性質が現はれる時期には夫々自然として

考へられ、或る度までは正當である。次の階段に於ては人間は再び他のものになり、前の諸性質については何等の根拠もなくなり、他の性質が表はれて来る。人間はかうして進んで行く。精神發達の各階段は夫々特有の性質が表はれる。故に各階段は夫々に適當な標準を以て測定せられねばならぬ。茲から各生活階段の構造的殊性の描寫の課題が生れて来る。

○ 人間が十分に成熟するまでの時期を一系列の階段に分割する企てが屢々試みられた。七年づゝ三期に區分する方法は其の一つであるが、これは大體に於て不正當ではないやうに思はれる。學校期の始まるのは生後七年頃である。十四歳頃になれば青春期が始まる。二十一歳頃には一般に成人となる。併し此各時期は男女によつても、また個人によつても異なる。一時期は或る個人にとりては三年で終ることもある。或る個人にとりては五年もかゝることもある。其の上一般に個々の階段は互に判然と區切られない。一時期から他の

時期に移るのは漸進的である。夫故に私共は純粹に時間的に區切らないで、各時期の本質的特色を研究するつもりである。

私共は先づ生後七歳頃までの間を兒童前期と稱し、此の時期に於ける特殊な精神構造を研究しようと思ふ。コフカが其の著兒童心理學(九一頁)に於て『世界は凡てに對して同様に存してゐる』といふ見解の誤つてゐるといふことを力説してゐる。實に非音樂人が交響樂を音樂人とは全く異つて聞くやうに、新生者は世界を成人と全く異つて體驗するやうに思はれる。新生者も生後間もなく意識を有することは疑ふことが出来ないが、新生者が豊富なる精神現象を有するといふ古説は適當ではなく、むしろ新生者の精神現象を單純であり、異化してゐないとして理解することが適當であらう。兒童も經驗し、學習するが、併し、兒童の世界は成人の世界とは根本的に相違してゐるやうに見える。然らば如何にして此の兒童の世界を理解することが出来るであら

うか。凡ての精神現象は直接に私共に與へられる。故に凡ての心理學は自己の精神生活の觀察を以て始めねばならぬ。他人の精神生活は其の表現を通じて、推知し、理解し得るにすぎない。此の他人の精神生活の理解の場合には、私共は私共自身の構造によつて理解する。私共は私共と同様な人間と、同様な法則性を有する文化とのみを理解する。私共の構造と本質的に構造の相違する人があるならば、それを理解することは不可能である。その表現も私共にとりては全く無關聯であるであらう。

兒童の體驗が成人の體驗と實際に於て非常に、根本的に異なるならば、兒童の體驗に近寄る可能があるか。私共は兒童の世界を直接に私共に描出することは出来ない。兒童の眼を以て見ることも、兒童の觸覺を以て觸覺することも出来ない。私共は兒童の世界を理解するには感情移人的理解と解釋とによらねばならぬ。私共が兒童の世界を感情移入的に理解することが可能であ

るといふことは、私共は兒童が見るやうに見る能を成人として全くは失つてゐないといふことを豫想してゐる。私共は曾つては兒童の世界に生活してゐた。此の兒童の世界と後の世界とは全く無關聯ではないから、成人はなほ兒童の世に移入することが出来るのである。故に成人が銘々の兒童期を回想することが兒童心理學に對して價值があり得る。私共は多くの傳記や自叙傳から、多くの心理學の見解を得ることが可能である。ゲーテの『詩と眞理』(Dichtung und Wahrheit)や、ゴットフリード・ケラ(Gottfried Keller)のグリーナ・ハインリヒ(Grüner Heinrich)や、カール・フィリップ・モリツ(Karl Philipp Moritz)のアントン・ライザ(Anton Reiser)などに於て兒童期や青年期が非常によく描寫せられてゐる。勿論かゝる描寫は心理學の立場から云へば、科學的勞作に對する材料にすぎない。

兒童精神の特色を明らかにするために比較法が役立つ。私共は第一に兒童

の精神發達を動物の精神生活に關係せしめて考へることが出来る。第二には原始人の精神生活に關係せしめて考へることが出来る。私共は先づ第一の可能を簡単に考察して見よう。今日まで自然科学の研究した結果によれば個體發生に於て團體發生を反復するものである。胎兒生活の間に人間は動物的發展の種々の階段を経て行く。此の身體的發展に關して樹立せられたる原則は人間の心的發展の上にも移して考へられる。従つて人間の心的發展も人間の動物的發展の種々の階段を経て進んで行く。私共は此の際動物的發展を平面的發展の上に移して考へてはならない。此の兩種の發展はむしろ異つた平面の上に行はれるからである。私共は私共の心的發展を動物の發展に關係せしめて考へることが出来るが、私共の靈的發展は人間の種の範圍内の發展と比較せねばならぬ。人間のみが靈をもつてゐるからである。

私共が靈的發展を考へるときに、民族心理學的方法が前面に現はれて来る。

民族心理學は人のよく知る如くウイヘルム・ウント (Wilhelm Wundt) によつて發展せられたのであるが、人間の靈的發展を研究することを任として居る。私共は人間の靈的發展を文化の發展に於て追跡することが出来る。精神的靈的發展が關係する所では、勿論個體の發達と動物の發達及び人種の發達との一致が身體的發達ほど完全であり得ない。何となれば精神的靈的發展が身體よりも遙かに多く外界の影響に依憑して居るからである。原始人は文化人の兒童とは異つた條件の下に生活する。故に形式の具體的構成は兩方の場合に於て異ならざるを得ない。人間が原始人時代に體驗したことゝ、兒童が今日體驗することゝは同一であり得ない。兩方の場合に於て全く異つた内容が意識を滿たす。併し、原始人と他の凡ての時代の兒童が體驗する種類と方法とは最も廣い範圍に於て一致し得る。私共の茲で問題とする點は内容ではなく、仕方である。一體原始人が如何様に此の世界を體驗したか、兒童が如何様に

此の世界を體驗するか、これが私共の問題である。

兒童の體驗と原始的な精神とを比較することは兒童の特殊な生活形式を明らかに示すやうに思はれる。有名なる人類學者レオ・フロベニアス (Leo Frobenius) が一九二一年に公けにした『文化及び精神學梗概』(Umriss einer Kultur- und Seelenlehre) に於て人種の發達と個人の發達との間の比較を研究せんと企てゝ居る。其の中に次の例があげてある。或る學者が机によつて研究してゐる際に彼れの四歳になる娘の子がやつて來て其の室内を駆けまわり、邪魔になつた。そこで父は三本の燐寸の棒を與へて『これで遊べ』と命じた。そこで兒童は敷物の上に座し、此の三本の燐寸の棒を以て或る遊戲をやつて遊んだ。此の兒童は永い間かうして遊び、學者は自分の仕事を妨げられずに居た。所が突然此の兒童が叫び出した。父は『何だ』『どうした』ときいた。兒童は大いなる不安の表情をしながら、『父よ、此の魔女をつれて行け。私はもはやこ

の魔女を捕へることが出来ない。』と云つた。此の兒童の態度に於ける特色は何であるか。此の兒童は何等の價値のない燐寸の棒を以て遊んだ。兒童にとりては燐寸の棒が魔女になつて居たのである。兒童の内部に活動して居ることを兒童は外部にも見出したのである。想像形態が兒童には現實になつて居る。兒童は燐寸の棒の中へ表象を入れる。兒童の燐寸の知覺像と此の表象とは融合する。實に兒童はかうして燐寸の棒の魔女を直接に體驗する。兒童の内部に行はれて居ることは兒童自身にとりては現實價値を有するのである。内的現象と外的現象とは兒童に際しては成人の場合のやうに別立しては居らなう。

これを私共は原始人の態度と比較する。原始人にとりては此の世界は私共に對する様想と全く異つた様想を呈して居る。死んだ事物と生きた事物との間の差異を原始人と私共とは異様に認める。原始人にとりては凡てが精神を

もつて居る。全世界は原始人に影響する鬼神によつて生かされて居る。事物は原始人にとりては神聖なるものである。

兒童は客觀的な、或る關聯に於て互に立つてゐる事物の世界、事件が全く一定の法則に支配せられて居る世界を知らない。事物に於て私共に有價值に見えることは兒童にとりては一般に考に入らない。事物は、事物が兒童に對して立つてゐる關聯に従つて全く異つた意味を有する。このことは三本の燐寸の棒の遊戯の例で分る。かゝる例はいくらもあげられる。

兒童は原始人同様に仕事を知る。兒童は或る一定の時間に於ける、或る一定の場所に於ける拘束を知らない。兒童は全く現在の瞬間に生活する。兒童が爲し、行ふ中に全く生活する。夫故に兒童に於ては主觀と客觀とが別々に起らぬといふことが出来る。兒童は凡ての中に生活する。凡てがまた兒童の中に生活する。世界と自我は兒童にとりては一個の統一である。夫故に私共

はフレーベルに従つて、兒童の生活形式を凡てと一致宥する生活として表はすことが出来る。ジムメルの表現法を用ゐるならば、未發展統一の階段(Das Stadium der unentfalteren Einheit)として表はすことが出来る。此の根本構造から兒童の凡ての生活表現が理解せられるやうに思はれる。就中兒童の事物に對する舉動が理解せられるやうに思はれる。私共にとりては燐寸の棒は正しく燐寸の棒であり、棒切れは正しく棒切れである。併し、兒童にとりては燐寸の棒は悪い魔女であり、棒切れは私共が愛せねばならぬ。またそれを以て喜び得る。遊び得る人形である。この點からまた、事物が他の關聯に立つならば、他の特色を有し、他のものとして考に入つて來ることが理解せられる。父が棒切れをストロヴに入れるのを見ると、人形であつた兒童の棒切れをストロヴの中に入れる。兒童にとりては對象に於て常に只一面のみが考の中に入つて來る。其の方面が兒童にとりては全事物を意味する。鞭は兒童にとり

ては、多くの異つた目的に使用し得る對象ではない。只戸棚の下の球をとり出し得る事物である。夫故に兒童は棒を、球が戸棚の下にないときでも、此の仕方に用ゐることを私共は見出し得る。

自我と外界とは互に別離して居らない。精神は未發展統一を形成して居る。夫故に兒童は自分の凡ての活動の中へ全く入り込む。この點から兒童に適當せる只一つの活動方法即ち遊戯が存することが分る。實に遊戯に於ては全精神が活動する。フレーベルが此の遊戯の本質を認めたことはフレーベルの不滅の功績として考へねばならぬ。「遊べ、遊戯は兒童發展の最高の階段である。此の時代の人間發展の最高の階段である。如何となれば遊戯は内部の自働的表現であるからである。内部自身の必要と要求からの内部からの表現であるからである。遊戯は此の階段に於ける人間の最も純粹なる精神的生産である。同時に總人間生活の手本である。遊戯は愉快、自由、満足、平安、平和を生

ずる。凡ての善の泉は遊戯の中に休み、遊戯から出る。巧みに、自働的に、靜かに、繼續的に、身體的疲勞にまで遊戯する兒童は、たしかに、巧みな、靜かな、繼續的な、犠牲を以て他人及び自分の幸福を鼓舞する人となる。遊戯する兒童、遊戯に全く入り込む兒童、遊戯の中に全く解け込む兒童が兒童生活の最も美なる生活を生活するのである。』フレーベルはなほ進んで兒童の遊戯は決して瑣事ではなく、高き熱心であり、兒童の發達に對して深き意味あることを力説した。

遊戯のみが全體の分割せざる人格の歸依を可能にする。遊戯に於てのみ自我と世界との間の不和が止揚せられる。遊戯は或る度まで成人に附着する多くの弱點を免除する。夫故にシラ (Schiller) が、人間は遊戯する時にのみ全人であると云つたのは正當である。遊戯に於て兒童の美が存する。遊戯せずして、目的を立し、それに従つて行動する兒童は決して兒童ではないであろう。

夫故に對象の生産は兒童には未知である。如何となれば、かゝる活動は既に目的への轉向を豫想するからである。遊戯に於ては精神の力のみが活動する。此の活動の中に遊戯の意義が存する。如何となれば遊戯に於ては兒童の全體の分割せられざる精神が存するからである。自我と世界との不和は茲には存して居らぬからである。それ故に兒童に於てのみ完全なる幸福が存する。夫故に私共は兒童期を幸福の時期と見る。

## 第十四章 兒童後期の生活形式

(Die Lebensform der späteren Kindheit)

兒童理解の視點——如何にして兒童に知能が發展して來るか——黒猩猩の學習——原始人の學習——文化人の發明發見——兒童の問題解決——進歩の二つの行績——對象の世界の分離——知能の分離——成人の世界の分離——兒童後期の生活形式

私共が兒童前期について述べたことは單純化せられてあり、理想化せられてある。従つて具體的の現實在に於ては多くの變化があることは殆んど明確なる論及を必要としない。併し、成人の生活形式の表現の場合と同じく、兒童前期の生活形式についても、凡ての個々の現象を理解する視點を明らかに



しようと企てたのである。兒童が發達するにつれて兒童の各體驗の統一、各經濟の統一が漸次破壊せられて行く。兒童前期の生活形式である未發展統一が如何して破壊せられて行くか、これが私共の次に考察しようとする所である。兒童後期の生活形式が茲から出發して行く。

兒童は經驗し、學習する。經驗が成長するにつれて精神の總構造から一機能が漸やく高まつて来る。此の機能は永い間、他の機能と密接なる關聯に於てあり、また精神的總構造の中に入つてゐるが、漸次明らかになり、獨立して行く。客觀世界の征服を目的とする知能がこれである。併し、私共が兒童に際して成人と同様な知能の種類と方向とを豫想してはならぬ。兒童の知能は學者の知能と同様であり得ない。兒童は原始人同様に熟考する問題を知らない。兒童は事物を説明することに興味をもたない。説明に對する要求は兒童には成立しない。一體兒童の構造の框内に於て何處に於て知能が重要であ

るか。私共は暫らく兒童を観察して見よう。兒童が好める對象例へば菓子卓上にある。併し、卓が高いために兒童が直接菓子に届くことが出来ない。兒童がボールで遊戯してゐる際に、ボールが戸棚の下に入り、兒童の力ではとり出す事が出来ない。此の二つの場合に於て兒童は随分不安になり、恐らくは成人を探し求めるであらう。もし成人が助けてくれない場合には激怒する。かうして兒童は萬難を排して目的物を得ようとする。此の機會に兒童の知能が表はれて来る。如何にして萬難を排し得るか、これが兒童にとりて意味ある課題である。

かゝる任務を現實に正當に遂行することを兒童は如何にして學習するか、茲に於ても私共は動物や原始人と比較して研究して見よう。私共は動物が思慮的に行動するかどうかを近頃まで論争してゐたのであるが、ケーラ (Köhler) が一九二二年に公けにした其の著「擬人類の知能検査」(Intelligenzprüfungen

an Anthropoiden) に於て思慮的行動は黒猩猩々に際して現はれることを證明してゐる。ケールは次のやうな研究を報告して居る。黒猩猩々が居る獸檻の柵の前に動物の達し得ない所に一個の果物がある。檻の中に、手の届く所に、果物を引き込む爲めに使用し得る棒がある。此の棒はこの動物によつて既に數回使用せられた棒であつても、此の棒を果物を見て居ては見えないやうにして置き、棒の方を見れば、果物が見えなくなるやうにして置けば、此の棒はその道具的性質を失つて仕舞ふ。即ち此の場合には黒猩猩々は棒を使用しない。種々の手段を用ゐて黒猩猩々に檻の後方にある棒を見させたが、此の場合には黒猩猩々は果物を見ることが出来なかつた。それで棒は無價値であつた。朝に於て黒猩猩々をして棒をとり、これを使用して果物をとらしめて置いて、午後に至つて前のやうな場所に棒を置けば動物は棒を使用することを知らない、例令動物が棒の上に来たり、或は棒の方向を見ても、然るに動物が目的物の

近くに於て棒などを見る場合には、少しの躊躇もなく棒を使用して目的物を取り、大いなる食欲を以てこれを食ふ。夫故に黒猩猩々が與へられた問題を解決するためには目的物と棒とが一緒に見られねばならぬ。勿論此の動物が棒の使用に熟して来れば此のことは須要ではない。以上の事實は總狀態が先づ動物によつて統一的に關聯的に捕捉せられねばならないことを示すものである。此の第一に與へられたる關聯から、其の重要さのために一要素が出て来る。此の棒は單に一定の形ある棒として、はなく、むしろ始めから果物を捕るものとして、即ち道具として見られる。棒は總形勢によつて全く一定の意味をもつのである。故に私共は、與へられたる統一的關聯から、一體が自ら高まり來たり、特別な重要さを得ることによつて動物が學習することを主張するのである。

原始人が如何にして經驗し、學習するか。原始人が如何にして發明するか。

私共は茲にウントの民族心理學から例をとることにする。凡ての原始的器具は主として自然の生産である。その自然の生産に人間が少しばかり加工したものである。槌や棍棒の如きはこれである。原始的の武器についてもこのことが考へられる。人間が稠密なる灌木林を急行するとき、自分の身體によつて曲げられた木の弾力を知り、此の木を自分の目的に使用することによつて弓が起つたのである。林を通つて走り、木を折り返すといふ事實によつて統一的の總狀態から棒の折返しといふ一要素が自ら分離して來た。原始人はかうして曲げられたる木の中にある力を知り、棒を曲げて木皮紐で兩端を結び、この力を永續的にし、弓の普通の形を得たのである。かうして出來た弦に軽い棒を置き、此の棒は弦によつて強い押す力を與へることを工夫し、矢が出來たのである。併し矢の發明に際して他のものが加はつて來た。然かもこれはかゝる原始的の發明に際しては、自然が少なからず仲間入りをすることを

示して居る。矢は尖りたる棒或は石や棒の尖りを備へたる棒からなるのみならず、矢は一方に羽毛をつけて居る。これは鳥の運動を矢の運動の上に移したのであるが、此の際にも鳥の飛ぶ知覺から或る要素が特に本質的に分離せられ、特別の重要さを得て矢の羽が出來たのである。

文化人はどうして發明發見をするか。其の根底に横はる過程が原始人の過程と異なるかどうか。私共は茲にヂエナ (Lerner) の種痘發見の例をあげて見よう。疱瘡が傳染性であることも、傳染の經驗が免疫を生ずることも多くの自然人が既に知つて居た。疱瘡の家畜に接觸した搾乳者が手に疱瘡同様の腫物を生じた。併し疱瘡を病まなかつた。かくして故意に種痘すれば免疫を生ずることも證明せられた。ヂエナはかゝる場合を追及し、牝牛の疱瘡を詳細に研究した。彼れは二十年間の經驗と研究との根據の上に始めて種痘を實行した。此の場合にも亦全く一定の統一的關聯が與へられた。牝牛の疱瘡を經

驗した個人の免疫といふことがこれである。此の關聯に於て牝牛の痘瘡の輕き罹病の事實と、これによつて條件づけられた免疫の事實とは特別な重要さを得て、自ら高まつて行つたのである。かく高まり行くことに知識の進歩が存する。

私共は上に動物は如何にして學習するか、原始人が如何にして發明發見をなすか、文化の進歩は如何にして完成するかを實例について示したのである。さて兒童は何れの道を通つて進んで行くであらうか。兒童に際して統一的關聯から個々の分岐が如何にして分離して行くか、如何にして特別の意味が生ずるか。即ち兒童が如何様に經驗し、如何様に學習するか。エリッヒ・シュテルンが觀察した例を次にあげる。兒童が食堂の卓のすぐ近くにある車の中に座してゐる。兒童が立てば、手を以て卓の端に達し得る。小さな菓子を卓の端に置けば此の兒童は自らこれを取る方法を知つてゐる。所が菓子を卓の端よ

りやゝ離して置き、兒童はそれに直接達し得ないやうにして置いた。兒童は二度それを取らうと試みてやめ、叫びだした。暫らくして後兒童が菓子を押して貰つた。三日間これを繰り返した。第四日目にテーブル掛が兒童の車の中に入り込んでゐた。始め兒童が菓子を手で取らうと企てた。併し取ることが出来なかつたのでテーブル掛をつかみ、これを引いた。かうして菓手に届くことが出来た。兒童がこれを反復して成功した。併し今や此の兒童はテーブル掛が車の中へ垂れてゐなくても引き、菓子が卓上になくても引いた。併し間もなくそれをやめて仕舞つた。次に可なりよく走れる兒童についての一例を示さう。その小供を室の一隅に置き、その小供の面前で他の隅にある机の上に一つのチョコレートを置いた。兒童は此の事件を大いなる興味を以て見、チョコレートを欲しいから叫び始めた。併し自ら動いてチョコレートをとることを考へなかつた。併し此の兒童を助けしないで、暫らく叫ばして置い

た。そこで此の兒童は二三步前方へ出た。所が敷物の上で倒れた。すぐに起きた。それからチョコレートをとりに走つた。兒童は偶然に前方へ出て、偶然に倒れ、目的物に近づいたことを知つたのである。次からは此の兒童は何等の障害もなしに直ちに正しく問題を解決した。

ヂエナの種痘發見の場合について考ふるに、疑もなく多くの個人が、ヂエナより以前に疱瘡の家畜と接觸の後免疫になる事實を知つて居た。ヂエナが行績は此の事實が彼れのために分離して、特別の重要さを得たことと、彼れが此の事實から推論をなしたことに存する。茲に多くの群衆と少數の卓越者との差異が存する。群衆は凡ての同様の過程を見る。併し群衆は特殊のものを取り出さない。ヂエナは群衆に生起した事實を見、特殊のものを取り出したのである。兒童に際しても同様である。兒童に際しても凡ての進歩は同様の形をしてゐる根底から或るものを分離し、取り出すことを意味する。この

ことはコフカも既に力説して居る所である。無から新らしきものを創造し、發見することは動物も、自然人も、文化人も、兒童も出来ない。それにも係らず凡ての現實の進歩は純粹なる新創造である。一旦得られたことは固執せられる。茲に記憶の任務がある。一旦得られたるものが固執せられるから、其の上の進歩が可能となるのである。故に凡ての進歩は二つの行績から成立する。新創造の行績と記憶の行績とがこれである。

兒童は間もなく、事物は兒童が欲するやうに單純ではなく、事物には兒童から獨立な現象が屬することを學ぶ。茶碗を私共は棒のやうに床上に投げない。投げれば茶碗は碎けるからである。私共は戸棚や戸に倚りかゝる様には倚りかゝらない。倚りかゝれば私共は自らを焼くからである。兒童はかゝる経験を積んで事物の特色を知つて行く。かうして兒童は事物の背後を見んと欲する。これが兒童の研究衝動である。兒童はまた経験を集めようと欲

する。これが兒童の蒐集衝動である。兒童は郵便切手を集めたり、燐寸箱を集めたりする。兒童は此等の事物の正當なる用途を知らない。只此等の事物を列ねたり、所有したりすることを喜ぶにすぎない。かうして兒童前期生活の統一から對象の世界が漸次分離し、兒童の努力は此の對象の世界を、此の對象の世界の征服を、此の對象の世界の所有を目ざして行く。凡ての認識は客觀性を要求する。感情と意志とが餘り強い所では、私共は現實在を正當に理解することが出来ない。また現實在の中に成立する關聯を正當に理解することが出来ない。認識は平靜なる思慮を要求する。兒童前期即ち狹義の兒童期の兒童の場合には個々の機能の分離と重視とは問題ではないが、兒童後期の兒童即ち少年期の兒童になると知能が明らかに現はれて来る。

少年期に於ては、兒童が王であり、主人である兒童の世界の外に漸次成人の世界が起つて来る。成人の世界に於ては兒童の理解せざる目的がある。換

言すれば遊戯の世界の外に勞働の世界が表はれて来る。少年はもはや自分の力を自由に遊ばして置くべきではない。少年の力が自分以外に置かれた目的に向けられねばならない。兒童の年が加はるにつれて成人の世界を學習して行く。兒童が爲してはならぬときに、兒童が食つてはならぬときに、兒童に對立して居る世界を學んで行く。

此の兒童前期の生活の特質は何であらうか。此の少年期の生活の特質は原始的統一が多様に分離することである。原始的統一が種々の無關係の相隣して立つてゐる區域となる。客觀の世界が分離する。成人の世界が分離する。就中兒童は外界に向ふ。兒童の知能は此の外界を占領せんことを求める。感情と意志とが此の外界に關係する。兒童が此の世界を支配する前に此の世界を學んで行く。私共は此の階段を外界へ向ふ階段 (Das Stadium der Zuwendung zur Aussnwelt) として、或はジムメルに従つて、發展せる多様の階段 (Das Stadi-

um der entfaltenen Vielheit) として表はすことが出来る。即ち原始的統一が分離せられ、一列の力が互に對立して居る。成人の世界が兒童の世界から高まつて来る。

## 第十五章 青年期の生活形式

(Die Lebensform der Jugendlichen)

青年期の任務——客觀の世界と成人の世界の出現——自我の發見——青年心理の研究法——性の變化——精神的領域の革命——經濟に對する興味——理論的意識——藝術的領域——社會的領域——政治的價值領域——宗教的領域  
人格の成長——價值を求めてやまない——青年の動搖——青年の反抗——青年の理想化——處女の特徴——時代精神と環境——永久の發展

兒童前期の生活形式は未發展統一 (unentfaltete Einheit) である。兒童後期の生活形式は發展多樣 (entfaltete Vielheit) である。或は兒童前期の生活形式は融合の生活であり、兒童後期の生活形式は融合の破壊と外界への轉向とである

とも云ふことが出来るであらう。此の發展多から再び統一——發展統一 (entfaltete Einheit) が生れて來なければならぬ。併し、此の統一は自我と世界との間に發生してゐる間隙に橋がかけられることによつてのみ生れて來ることが出来る。そのためには先づ私共は此の間隙について意識せねばならぬ。このことは私共が自らに向ひ、私共の表現する世界を發見することによつてのみ可能である。内部に向ふことに、自我の發見に、同時にまた外界の全く新しい方面の發見に此の青年期が役立つのである。青年期に於て世界と自我との間の和睦に對して行はれねばならぬ争が行はれる。一般に發達の最後の目的に對して、行はれねばならぬ争が行はれる。私共はこれまで人間を兒童 (Kind) として表はし、其の生活の時期を兒童期 (Kindheit) と稱したのであるが、此の人間が今や青年期 (Das Jugendalter) に入つて行く。

發展多様の生活形式、外界轉向の生活形式が如何にして此の新らしい生活

形式に轉移するか。私共は經驗の増加につれて外界の事物が全く無關係に相互に對立してゐないことを知つて來る。各對象は互に關聯してゐる。私共は今や事物の一面を高めることによつて事物を記述することが出来ない。私共は事物を全く理解することを企てねばならぬ。かうして直觀的に與へられたるものから概念的のものに轉向することが完成し、具體から抽象へ轉向することが成就して行く。即ち凡ての高等なる精神活動の必要なる豫想が完成して行く。また成人の世界が漸次其の權利を要求して來る。自分の世界に於てのみ、遊戲の世界に於てのみ、自由に感じた兒童は、年が増すにつれて目的の定まつた仕事に馴らされねばならない。この場合には成人の目的が兒童に描いて示される。如何となれば兒童の世界には目的がないからである。兒童は今や作業とは何であるか、遊戲とは何であるかを學んで來る。作業と遊戲とは互に嚴密に區別せられねばならない。未分の統一のみがある間は兒童に



とりては遊戯もなく、作業もない、只遊戯として表現する生活があるばかりである。今や作業の發見と共に兒童は遊戯を發見する。兒童は今や成人と異つた世界に住んでゐることを始めて意識させられる。かうして兒童期の終りになつて、兒童に客觀の世界が先づ生れ、それから成人の世界が獨立の世界として起つて來る。

成人の世界と客觀の世界とが兒童に、その方に向かねばならぬ未知の、獨特の世界として對立して表はれ、來るから、兒童が自分を意識するやうにならざるを得ない。兒童が何か、と欲するときに障害を體驗する。此の障害を兒童が征服するやうに自ら、せねばならぬ。其の成功、不成功が兒童の意識に上つて來る。兒童が此の障害を明らかに感ずれば感ずるほど、これが明らかに兒童に意識せられ、ばせられるほど、始めは未分の統一の中に含まれてあつた他の方面が明らかに表はれねばならぬ。即ち自分の世界、自

我の世界が明らかに表はれねばならぬ。かうして茲に此の自我が全體として與へられたる體驗關聯から分離する。青年は實に自我を發見する。青年は自我を彼れに新らしい未知のものとして見出すのである。今や青年は此の自我に自ら向ふ。青年は、かくくの特質のものとしてのみならず、同時に他と區別せられる特殊のものとして自らを發見する。かうして青年に自己觀察の時が始まり、自己判斷の時が始まる。青年の意志は今や此の自我の上に向ふ。彼れは將來の發達を考へる。到達せんと欲する目的、行動を決定すべき目的を豫め考へる。かくして自己觀察、自己批判、自己構成が生れる。最後に彼れを動かすものを表現せんとするものが彼れの中に生きることによつて自己表現が生れて來る。凡て此等の可能性が兒童期の終りに發展する。かうして全く突然に兒童期の夢から目醒めて來るのである。

青年期の生活の特徴を述べる前に、青年期研究の方法について一言しよう。

兒童前期に於ては母が兒童を觀察し、日記法によつて記載することが出来る。併し、此の可能は年齢が長すると共に減ずる。兒童に作用する影響が多様になり、複雑になり、概見しがたくなり、兒童が一日の大部分母の觀察を離れるやうになるからである。學校時期になれば教師が兒童を觀察し、その發達を追跡する機會を有するやうになる。兒童前期に於ては個々の兒童の考察が問題であるが、學校期になれば團體觀察、統計、比較が重要になつて來る。これによつて多くの支配外の影響のために起る缺點が或る度まで防がれる。兒童前期に於て或る役目をなす實驗心理學的研究が學校期になれば最も本質的な研究手段となる。勿論茲に云ふ實驗の概念は廣義のもので系統的質問、一定の指導によつての作文、繪畫等をも包括する。併し、從來の實驗的研究は全體としての兒童の上に殆んど向かないで、寧ろ個々の機能を別々に扱つた。兒童の個性が全體として如何に發展するかについては直接に何等の結論

も得なかつた。一體に兒童には實驗的研究は比較的容易に可能である。機能の關聯は疎である。機能はまだ價值に中心を有しない。兒童後期に於ても實驗が有價値な有効な解釋を與へることの出来る時期である。併し、青年期に至れば萬事本質的に異つて來る。親の日記は無價値も同様になる。實驗には大なる外的困難が生じて來る。多數の青年を共通の外的條件の下に置くことは簡單ではない。多數の青年にとりては學校はもはや唯一の集合所ではない。精神的發展の上に大なる影響ある職業條件なども多形多様となる。更に本質的に重要な他の要素が加はつて來る。人格の中心が價值生活に存するやうになつて來る。青年期に於ては人間が價值生活を發展して來る。青年自身は自分の人格の中心を發見して來る。青年の體驗に全く一定の形を持たしむるものは價值に對する熱望と深求とである。青年の此等の特質は實驗にはむかない。其の上に青年は容易に實驗せられなくなる。尋問、諮問表などは

本質的の見解をつくることが出来なくなる。併し、青年は自分の體驗を日記に、手紙に、詩に發表する傾きを有して来る。かゝる表現は青年研究の甚だ重要な源泉を形成する。青年心理學の本質的の研究方法は、青年の精神生活への直接の移入である。これが出来なければ青年の精神の理解は困難である。

青春期の精神的變化と共に身體的變化が行はれる。此の兩者は直接に關聯するから、殆んど分つことが出来ない。此の事實は性的狀態の變化について特に考へられる。卵巢、精巢は卵、精細胞を準備する任務を有するのみならず、更に他の機能を有する。即ち卵巢精巢は一種の物質を生産し、直接血液に送る。此の物質は血液内で循環し、身體的生活に對しても、精神的生活中に對しても重要となる。かうして青春の身體の特徴も精神の特徴も起る。此の内分泌的生産——卵巢精巢でつくられ、直接に血液に送られる物質——は特

に感情生活に大いなる影響を及ぼすものである。尤も人間の性は青春期に始めて新しいものとして表はれるものではない。フロイド (Freud) は一九〇五年に其の三版を公けにしてゐる『性説三論』(Drei Abhandlungen der Sexualtheorie) に於て性は兒童にも存する。只性生活の形式が異なるにすぎないと云つてゐる。併し、青春期には性の最大の變化が起ることは事實である。此の性の大變化は精神生活に大いなる影響を及ぼすものである。性衝動の始めての意識及び女に起る生理的變化例へば月經の如きは精神の平衡に大いに影響するものである。

青年期に於ては精神的領域に最も深い革命が起る。教授と教育とが兒童に既に多くの文化領域の價値を與へた。併し、兒童は價値内容に對して正當なる理解をせずして價値を採用し、これを建設する。シラーの詩の美、科學的業績の意味、愛行爲の價値は兒童には未知である。兒童は此等について繰り

返しく聞いたにしても。併し、文化價値の受容に於て人間の價値意識、人間の精神構造が發達し、開展する。精神の構造は成就せるものとして與へられない。青年は如何なる領域に自分の生活の中心が置かれるかを知らない。寧ろ此の人格的中心は青年になつて始めて漸次形成せられるものである。青年は自分の生活の中心點は如何なる領域に置かれてあるかを發見する前に、凡ての可能價値領域を通り過ぎねばならない。

經濟に對する興味が成長する。青年は金と財産との價値を知つて來る。この助けによつて見ての可能享樂が可能となるのである。青年は經濟的に家庭に從屬してゐることを感ずる。此の從屬のために親の意志に從はねばならぬ。自分の好むやうに自由にならぬ。かうして青年は經濟的に獨立たらんことを欲して來る。經濟に於ける興味、職業作業に於ける興味が動き始めて來る。勿論その興味の方向や天賦などには差異がある。經濟的事項に於ける興味は

技術に於ける愉快に於て表はれる。青年は技術的著作を熱心に讀み、種々の方面に於ける技術の進歩を知らうと求める。諸種の器械に對して興味を覺え、多數の生産統計に對して驚嘆し、汽船、汽車、自動車などの速力などについて驚嘆する。青年はかゝる仕事に入らうと欲する。技術的職業が青年に嗜好を以て選擇せられる。また青年が自分の力を測定すること、自分の力を他の力と比較することなどに於ても經濟的要素があらはれる。併し、青年は正當なる判断をなすために必要な經驗を缺くから理想に走りすぎる。

理論的意識が動き始めて來る。兒童期に於ては種々の領域に於て關係なく並列せる知識を得た。然るに青年期に入りては分離せる個々の事實を關係せしめ、到る處に眞理を得んとする熱心なる努力が起る。青年は個々を越えて出て、世界像を創造せんと欲する。勿論此の研究は純粹に事實的客觀的ではない、眞理を容易に偽造する感情及び意志行爲によつて行はれる。併し、青

年時代には抽象的思想の發達の結果、科學的研究に對する豫定條件が始めて與へられる。此の認識興味は一度は外へ、客觀の世界へ、事實の世界へ向くが、また自分の自我にも向く。即ち人間を認識しようとする。青年は喜んで論議する。青年は困難なる問題を解明しようとする。併し、青年には客觀性に於ても根本的認識に於ても缺くる所がある。また青年は科學の領域に於ける大行績が最も熱心なる勤勞を豫想することを見誤る。青年は科學的大行績は既に他人が建築し始めた大建築の増築であることを見誤る。青年は一方に於ては此の増築作業の價値を輕んじがちであり、他方に於ては行績の創造性、人間に於ける自己創造を高價に見積りがちである。

藝術的領域が青年の本質に近く横つて居る。青年は常に瞬間に自己を全く捧げようと欲する、瞬間を全く享樂し、味ひ盡さうと欲する。青年はまた凡ての特殊を十分に捕へようと欲する。茲に既に青年の美的傾向が存する。ま

た青年の美的渴望は直接に満足を求め。自然に於ける歡喜、自然に對する愛は疑もなく藝術的の所があるが青年期に特に活潑である。従つてまた遊歴に於ける歡喜、自然の中の徘徊に於ける歡喜、國民服裝に於ける歡喜、民謡に於ける歡喜に藝術的の所がある。自然は美の表現となる。他の人に於ける歡喜も亦屢々美的特質を有する、青年は他の人に於て自ら喜ばうと欲する、他の人との共存を享樂せんと欲する、青年は友を有しようとし、また友であらうとする感情の中に生きる。凡て此等の中に藝術に對して覺醒しつつある愛が表はれる。音楽や詩が前面に表現して來る。造形美術に對する理解はなほ永い間缺ける。音の美、言語の力が働き始める。青年は屢々文學者を美しい言葉のために讀む。ニーチェが青年の間に勢力があるのは言語に負うて居る。青年は新語、虚飾的の語、音調のよい語のために感動させられる。藝術の理解に、藝術に對する愛に——従つて個人に於ける藝術的精神方向の發展

に——表現に對する熱望が加はる場合には、青年自身が作詩し、歌ひ、稗史小説を書き始める。此の場合には抒情詩が重きをなす。氣分、憧憬、世界苦の描寫が屢々全體を支配する。青年の日記が特にこれを表現する。茲に青年の自分の自我に對する美的態度が表現する。

社會的領域は深く青年を捕へる。自我の發見は各人を圍む深き寂寞の發見を意味する。人間が青年の時ほど寂寞を感じることはない。青年には他の人との協同に對する渴望がある。愛に満ちた理解に對する渴望が生々してゐる。青年は人間を求め、友を求める。青年は他人の中へ自らを移入する能を有する。此の能は凡ての共同陶冶の根本的豫件である。勿論兒童の場合にも社會的態度が表はれる。併し、兒童は他の兒童と選擇せずして交はる。兒童が他の兒童と結合する根據は共同に何かに従事せんと欲する所に存する。夫故に兒童は外的の對象の上に向いてゐるので、他の人の上に向いてゐないと云ふ

ことが出来るのである。青春期が始まるときになつて始めて青年は自分を自我として體驗し、特殊として體驗し、他の人に於て他我を發見する。此の青年の共同に對する願望が正當に理解せられない。家庭では青年が兒童として考へられる。發達したる人格の尊敬に對する要求を理解せられない。それで家庭に對する反對意志が生れる。併し家庭に於ける愛に満ちた勘辨、青年の危険に満ちた精神に對する。成熟せる親の側からの深き理解は償はれねばならぬ。如何となれば親の反對は惡意からでなく、青年の全精神理解に根據を有してゐるからである。學校に於ても青年の社會的要求が十分に満足することが出来ないこともある。それで青年が青年として生活し得る社會の方へ努力する熱望が起る。學生聯盟はこの渴望の完成である。青年の社會的要求から純粹なる青年社會として生れたものは青年運動 (die Jugendbewegung) である。一般に青年運動は決して意識的に創造せられる聯盟ではない。決して一定の

規定による聯合ではない。青年の生活から成長した結合である。青年運動は缺點と弱點とを有する特有の構造である。青年運動自身に關する明瞭なる思慮を缺いてゐる。青年運動は何を欲するか、何に向つて努力してゐるかに關して熟慮を缺いてゐる。此の運動は卒直に或る目的への結合を恐れる。丁度青年のやうに、自由ならんことを欲し、自由に發展せんことを欲する。青年は此の青年運動の中に生活し、それ超越する凡ての文化を忘れる。青年は青年文化を有しようとする。青年が此の蠱惑の中に入り、成人の生活を支配すべき現實の文化、現實の社會との關聯を發見しないことは、青年社會生活の大いなる危険である。私共は青年が此の段階を超越して成長することを主張せねばならぬ。

政治的價值領域は青年に於て強く表はれる。青年は何か役目を果さうと欲し、力と影響とを有しようとする。人が彼れを認めないならば、人が彼れ

を壓するならば、青年の精神が大いに害せられる。青年や處女は、また外見によつて成人に見せようとする。凡て此等は或る度まで政治構造の表現である。併し、特有の政治的領域は青年にはまだ十分に表はれて來ない。青年は過激主義に傾く。青年は現實の生活が實際に要求することを十分に知らない。青年は家庭に反對し、學校に反對し、權威に反對する。青年は自由を欲し、獨立を欲する。併し青年は其の理想を實現することが不可能であることを感ずれば指導者にたよる。かくして選定せられた指導者に犠牲的に盡す。こゝに美點も存し、危険も存する。

宗教的領域に對する青年の關係は深い。宗教心は生活と世界の總價值への轉向である。青年に於て始めて生活及び世界の意義と價值とに關する大疑問が起る。青年は到る處最後まで、絶對まで欲求する。青年は單なる事實、個々の知識を單に積み重ねることでは満足する事が出來ない。寧ろ事實の結合、

世界像の關聯、凡てを豫示する世界像を得ようと努力する。青年は世界觀的文獻をよむ。青年は大問題を解かうとする。新らしい解決を見出さうと欲する。體系、形而上學への衝動が發達して來る。併し教會に對しては全く意味を誤解して憎惡、憤怒を體驗する。青年は舊信仰の代りに新信仰を求め、これが爲めに青年時代にはよく科學の神化が考へられる。併し、純粹なる宗教的價値に對する理解も青春期に成長する。青年期に改宗や入宗などの事例は多く見出される。青年期に入つて始めて宗教的の疑ひや良心の呵責が起る。

此等の六種の精神構造の方向は現實在に於ては內的に結合して居る。此の中の一つの傾向又は他の傾向が個々の個人に際して優勢であり得る。併し、青年の全時代を通じての特色は、凡ての此の異なる態度が同一個人によつて經驗せられるといふことである。かうして青年は如何なる領域に自分の生活の獨特の中心が置かれてゐるかを發見することが出来る。人格は彼れに適

當なるものを固執するために、存在する凡ての可能を通過するより外の方法に於て自らを發見することが出来ない。人格は彼れに置かれてある本質を實現すること、彼れに置かれてある構造を發展にまで持來することによつて人格となり得る。人格は内部から成長せねばならぬ。併し、人格は客觀的價値形態即ち文化の受容による道に於てのみ成長することが出来る。青年はかうして自らを發見する。

私共は具體的個人の發達の實際的經過を表現しようとして居るのではない。私共は青年の特殊の生活形式の理解が可能である見地を表現しようとして居るのである。此の見地は實に上述せる青年の精神の價値構造に存するやうに思はれる。私共は青年の生活形式を内部への轉向として、即ち價値探求として表はすことが出来るであらう。自らを發見した人、世界に對する態度を發見した人は安全の感じと內的平靜の感じとを有する。併し、此の世界



に對する位置と自分の自我とを始めて求むる人即ち彼れ自身に於ても、外界に於ても確實なる見地を有せぬ人は此の平靜を知らない。それで青年の内的不安、青年の興奮、青年の不確實、青年の緊張がある。兒童は平靜である。自己満足である。何となれば自我と世界との問題を知らないからである。成人はまた或る方法で自我と世界との問題を解決して居る。青年は此の問題と戦つて自由を求める。シャーロット・ブーラー (Charlotte Bühler) が一九二一年に公けにした『青年の精神生活』(Das Seelenleben des Jugendlichen) に於てのべてゐるやうに、<sup>1</sup>價值に對する憧憬は始めは形體なき、目的なき憧憬であるが青春期の後半に至つて始めて或るものに對する憧憬となる。不安が價值の受容と創造とにまで青年を押しすゝめる。一般に青年は求める。併し確實を發見しない。それで青年は自らを疑ふ。それ故に青年には凡ての體驗に於て陰鬱なる氣分がある——此の氣分は容易く厭世に移つて行く。青年は此の氣分に惑溺

する。併し、體驗に對する強烈なる慾望がある。此の慾望は或る度までは無意識的の希望に基づいてゐるが、これが恐らく自我にまでの道を發見させるのであらう。青年の精神は價值を求めてやまぬ。求めて十分に發見し得なければ厭世氣分が高まる。これが異常に進んで自殺に及ぶこともある。

青年は自分の不安定の感じから確實なる基礎を得ようとする。安定に對する欲望から尊重、尊敬への願望が起る。青年は内的確實性の缺陷を出來得る限り確實なる外的態度によつてかくさうと求める。かうして外的の安定が内的の人間に移り行くやうに思はれる。青年は自分の意志を凡ての環境を通して貫かうと欲するやうになる。かうして青年は屢々新らしい困難に陥る。青年は自分の力を高く見積り、不適當な仕事を企て、半途で止めねばならぬやうになる。かうして新らしい不安と新らしい争に入り込む。青年は反對の兩極の間を動搖する。自分の自我を尊重しすぎること、輕視しすぎること、

の間に、權威の否定と承認との間に、人間愛と内氣との間に動搖する。かゝることが青年の意識に明らかに上つて來ることがある。茲から他に依る願望が起つて來る。それで模範を求め、手本を求めぬ。青年が自分の根據であり、手本である人を有するときに非常に喜ぶ。青年は全く自由に行動すると考へてゐる間に、此の手本とする人から大いなる影響を受ける。

青年はもはや兒童でないことを體驗するが、また成人でないことも感ずる。青年は兒童期の特徴を脱ぎ棄て、全く成人とならうと求める。青年は成人に數へられんことを欲する。併し、成人は青年を兒童のやうに取扱ふ。青年は成人と共に數へられる權利があると考へる。夫故に青年は不正當に取扱はれてゐると感ずる。かうして年長者に對する憎惡が青年に覺醒して來る。この憎惡が時々各權威に對する憎惡となる。教育者との衝突や一般に生活に於ける衝突が思慮と理解とある取扱によつて避けられ得ることは力説するを要

しない。

青年には理想化の傾向がある。これが此の時期の特有の美をつくる。此の理想化は一部分は勢力ある美的態度、美的聖化の結果である。他の方面に於ては此の特徴は青年の全體の價值不安定と價值追求とによつて條件づけられて居る。何となれば目的を缺いてゐる青年は想像に於て目的をつくらうと求めるからである。青年は現實在の世界に於てよりは想像の世界に住む。夫故に青年の固執する目的はその光を想像の世界から得て居る。青年には經驗が缺けてゐる。夫故に理想を喜ぶ。即ち聖化せられ、理想化せられた目的が青年にあらはれる。青年は今度は此の目的のために靈感せしめられるかと思へば、今度はあの目的の爲に靈感せしめられる。各目的に於て青年は喜んで自らをそれに捧げる。青年は未だ生活の途中に横はれる困難を知らない。青年は世界を自分の考に従つて構成し得ると考へる。青年は凡てを薔薇色の光で

見る。青年は勇氣と行動力とに満ちてゐる。青年は自分の中に行動の力を感  
じ、價値を創造する力を感じる。此の場合に世界と人を知つてゐる成人が  
有する抑壓を缺いてゐる。青年は理想人である。理想を此の世界に於て表現  
せんと欲する理想人である。

此等の特徴は處女には多く表はれない。處女には他の特徴が表はれる。總  
じて感情が女性の精神の構造に於て大いなる役を演ずる。男性は女性よりも  
外に向いてゐる。客觀財の世界の上に向いてゐる。男性の欲求は中心から周  
邊に移つて行く。女性はこれに反してその構造が異つてゐる。女性に於ては  
社會的思慮方向が勢力を有する。女性の客觀的精神形態に於ける興味は遙か  
に小さい。女性には人間と人間との直接の影響が多く存する。女性の場合に  
はその欲求が周邊から中心に移つて行く。凡てこれは青年期に於て處女に表  
はれる。處女は青年よりも氣分に支配せられる。處女は厭世に傾く。また溢

るゝばかりの歡喜にも傾く。此の激變は驚くの外はない。處女は他の上への  
影響を求める。處女は反省に於ては男性に及ばない。處女は云はゞ無意識的  
に生活する。

人間が構成せられ、人間の現實の本質が決定せられるには多くの要素の關  
聯がある。此の要因の中に特に顯著なるものが二つある。一つは時代の一般  
的構造であり、一つは社會的環境の構造である。兒童期に於ては此等の要素  
の精神の構造の上に及ぼす影響は小であるが、青年期に於ては此の影響を見  
逃がすことが出来ない。

私共は今まで精神的發展をのべてきたのである。即ち人間に於て精神の世  
界が如何様に建設せられるかをのべたのである。自然科学的心理學は發生的  
問題を取扱ふ權利がある。即ち人間の心的現象が如何様に發達するかを追跡  
する權利がある。併し、自然科学的心理學は人間の心的發達の問題を盡さな

いこと、また精神科學的心理學的考察法が同様に正當の權利を有すること、實に精神科學的心理學的方法のみが人格の成長を追跡することが出来るといふことについて明らかであらねばならぬ。私共の問題は人間の精神が成熟するまでに如何なる構造形式を経過するか、自我と世界とが發達の間に如何様に相互に關係するかといふことである。私共は人格の本質については全く一定した根本見解から出發したものであることは既に述べた通りである。私共は人格の本質を價值への目的性に於て見る。ここからのみ人格の本質が了解せられるやうに思はれる。發展の目的は價值を目的とする完成せる人格である。内的の完成は内的の統一である。凡ての個々の心的機能の統一への融合である。また自我と世界との間隙の征服である。此の間隙は發達の始めには生ぜぬ。むしろ成長の途中に生ずる。此の間隙を除去することが生活の目標である。此の目標は無限の遠方にある。併し、此の間隙のみが精神的生活を可能

にする。人間を常に新らしい仕事に、新らしい創造に追ひ進めて行く。

## 第十六章 教育者の生活形式

(Die Lebensform des Erziehers)

教育者の生活形式を附加する理由——教育者の社會的生活形式の特殊性——  
醫師と牧師と教師——人間愛と文化愛——ペスタロチ——ケルシエンシュタイ  
ネル——理論的領域——美的領域——經濟的領域——政治的領域——宗教的  
領域——教師の人格の價值充實性

私は本書に於てエリッヒ・シュテルンの兒童の生活形式の研究を明らかにすることを企てたのである。第十五章までに於て大體此の目的を達し得たと考へる。兒童の生活形式を視點として兒童を了解し、かくしてその人格の陶冶と、其の個性の伸長とを任務とするものは教育者である。夫故に兒童の生活形式

に興味を有するものは、また教育者の生活形式にも興味を有するは正當であらうと思はれる。それで茲に教育者の生活形式について一章を加へることにした。

エリッヒ・シュテルンも云つてゐるやうに、教育は教育者の價值把束性及び價值構成能を内部から發展せしむることである。茲に教育者の特殊の任務がある。教育者の任務の中心點は茲にある。教育者は他の發展を目的とする。此の任務を果す上から見れば教育者は社會的典型に屬すると云ふことが出来る。併し、醫師の職業や牧師の職業の如きも亦他のためにつくす所に中心點がある故に此等も亦社會的生活形式に屬すると見ることが出来る。故に等しく社會的生活形式に屬するにしても教育者の社會的生活形式には特殊性があらねばならぬ。

教育者にしても、醫者にしても、牧師にしても、其の職業は凡て人間のた

めに盡し、人間の上に働き、人間に何等かの影響を與へようと欲する限りに於て非常に接近してゐる點がある。醫師の社會的生活形式についてヒボクラテスも云つてゐるやうに、醫師は其の技術を常に病人のために使用せん事を誓はねばならぬ。醫師の生活は常に神聖であらねばならぬ。凡ての人に對して醫師は親切に尊敬に價する精神の態度を表現せねばならぬ。醫師は社交的であらねばならぬ。何となれば氣むづかしい人は健康者に對しても、病人に對しても不快を惹起するからである。人間に對する愛情が存する所には技術に對する愛情も存する。人間に對する愛情は醫術への愛情、醫業への愛情の根本豫想である。牧師についても同様のことが考へられる。醫師は凡ての病人に接近してこれを助ける。牧師は他の人に神の子として接近し、これを神に導く。教育者は若い人の上に、力の弱い、發達してゐない兒童の上に愛情を向け、兒童の靈を價値の體驗のために開き、兒童に内在する可能性を實現

させる。

併し、此の兒童の愛護だけでは決して十分ではない。此の愛護は兒童の權利を主張するが教育の任務の他の方面即ち文化の保存と進歩とに對する方面には餘り注意を拂はない。此の愛護はエレン・キーやグルリットなどの考に進んで行く。近代の學校運動の多くの傾向は容易に此の態度に傾く。何となれば兒童の愛護は兒童からのみ凡てを判斷し、現存する文化を一般に認めないか、或は非常に輕んずる結果、根本から改造せねばならぬと考へるからである。これは教育の任務及び文化の發展を誤解するから起つて來る。文化を否定する人は教育することが出來ない。如何となれば教育は最高度に於ける文化行動であり、且つ常に一定の文化を豫想して居るからである。教育者はまた常に文化の中に存続する價値の守護者である。人間に内在する價値把束性は價値の採用によつて發達せしめられ、向上せしめられ得る。併し、文化

へ向くといふことは、教育者が萬事を善と稱し、文化の現存の關係及び條件への順應にまで教育せねばならぬといふ意味ではない。文化價値の理解と文化を以て充實することが問題である。文化への意志が問題となるのである。教會のみが決して教育機能を引受けることが出来ない。何となれば教會は靈の宗教的價値へ偏して居る。且つ凡ての他の價値を此の價値に對して小さく評價するに傾く。併し、教育は總文化に向はねばならぬ。凡ての價値を認めねばならぬ。人間に内在する凡ての價値方向の發展に努力せねばならぬ。故に愛の要求は云はば二つの方面に生ずるのである。教育者は一方では所與の文化價値への愛を表はさねばならぬ。また一方では若き個性への愛顧を表はさねばならぬ。文化と人間との間に云はば生きた仲介者として教育者が立つてゐる。教育者の人格は凡ての教育行動の中心に立つてゐる。私共は認識を書物から學び得ることが出来るであらう。併し、私共は陶冶を陶冶せられた

る價値を貫徹する教育者の人格からのみ受領せられ得るのである。

凡ての大教育家は此の社會的生活形式を具體化してゐる。試みにこれをペスタロチに見よ。人間への愛情、兒童への愛情は彼れの凡ての行動の動機であつた。不幸の沼澤中では人間が人間にはなれない。人間の第一義務は同胞の貧困を援助することであるとペスタロチは考へた。ペスタロチから受ける感動は彼れの教へからよりも彼れの生活からの方が大きい。ペスタロチは貧人のために自分の生活を捧げようと欲した。彼れは出版者から送つた金を投じて貧者教育所を建設するために土地を買つた。併し、ペスタロチが文化價値に接近してゐる事も亦彼れの多くの發表が示してゐる。社會に於て高き價値を認めてゐる。彼れは社會のために人間を教へようと欲した。教育によつて彼れは高等なる國家を建設することを助けようと欲した。勤勞と藝術との價値を著しく力説した。また宗教の價値を尊重した。何となればかゝる超個

人的價值のみが個人の靈を建設し得るからである。ペスタロチの碑銘はよく此のペスタロチの社會的生活形式の面影を忍ばしめる。「ここにハインリヒ・ペスタロチ眠る。一七四六年正月十二日ツーリヒに生れ、一八二七年ブルッダに歿した。ノイホッフに於ける貧民の救濟者、リンハルドとゲルトルードにて人民への説教者、スタントツに於ける孤兒の父、ブルグドルフ及びブッフゼーに於ける新國民學校の創立者、イヴェルダンに於ける人類の教育者、此の人や眞の人間、眞の基督教徒、眞の市民にして、身の爲めをば思はず、一意他の爲めに盡した。彼れの名の不朽ならんことを祈る。」

教育者の人格の本質についてケルシェンシュタイネルは次のやうに述べて居る。「私がまだギムナジウム の教師であつて、私の仕事として何等他の義務を持たなかつたから、私は常に自分の生徒と共に生活した。生徒は學校へ行く途中に於ても、歸宅の途中に於ても、私と一緒になつた。氷の廣場で私は彼

等に氷滑りの術を教へた。水の中に漬つて彼等と一緒に競争して泳いだ。午後の放課時間や休暇には私は兒童と田舎に行つて、田舎を教へた。永い休暇が終ると、日々の教場の仕事に對する熱望が起つて來た。」かゝる教育者の生活は實に愛情の生活であるが、ケルシェンシュタイネルは此の愛情を「若い無反省性中に」見られると云つて居る。純粹なる教育者は全生涯を通じて一種の兒童性情意を維持するものである。大教育者老は年に於てもなほ此の性情が存してゐる。ケルシェンシュタイネルは此の愛情の外に更に價值に關して力説して居る。凡ての教育は文化價值の傳達によつてのみ可能であるから、此の文化價值は教育者の中に活動してゐなければならぬ。教育者が兒童の上に偏し、る影響を與へることは多くの教育者の失敗である。茲に多くの努力の良効を結ばない重要な原因が存する。此の二重の態度が各教育者に對する典型的の判斷である。常に價值に満ちた人格のみが教育し得る。教育學的



行動は文化財を體驗し創造した人間が成長する人間に影響を與へて文化財生産者たらしむるために、文化財を復活し、構成せんと努力する所に始まるものである。教育者は第一に人間性を愛し得る人でなければならぬ。即ち社會的根本典型の生活形式の人でなければならぬ。此の根本典型は繼續的に年若き成長する人間の中に超個人的價値の將來の支持者を發見する。此の人間性を愛する人は、個人の靈に存する凡ての可能價値を文化價値の傳達によつて發達させようとする。此の文化價値に於てのみ個人が自己獨得の靈の構造を發展し得るのである。夫故に教育者は生徒の個性の上に同時にまた文化價値の上に向かなければならぬ。

理論的精神領域は教育者には遠い。理論人は事物を目的とし、人間を目的としない。理論人は凡ての人格的要素を排除し純粹に客觀的に研究しようとする。夫故に學者は教育者としては屢々劣等なることがある。併し、理論的

要素を排除することは教育者にとりては制限がある。教育は生徒の人格の認識を豫想する。何となれば教育は生徒に最も獨得な本質を實現させねばならないからである。それ故に教育せんと欲するならば、先づ生徒を知らなければならぬ。また生徒に知識を啓培せねばならぬ。更にまた教育の本質、教育の問題、教育の制限などを知ることが教育者に重要である。凡て此等は理論的精神動作によつて與へられる。

教育者は生徒の個性を理解せねばならぬ。個性を理解する際には美的態度が重要な關係を有する。何となれば私共は個々を美的體驗に於て始めて全く汲み盡すことが出来るからである。併し、他の人格に對する純粹なる美的愛情は云々他の人格、個性を享樂する際に存して居り、此の他の個性、人格の享樂から満足が生れて來るが、これは教育者にとりては根本的に誤つた態度である。併し、クルト・ツァイドラーの如きは「學校は青年のために存す

るのみならず、成人のためにも存してゐる。」とのべて、教育のみが戀愛の神に向けられねばならぬといふ結論を引き出してゐるが、これは危険な考である。私共はかうして熱狂者や、空想家や、美辭家などのみを育成し、人生に必要な人格を練成しないといふ危険がある。このことはガッゲルやワイメルなどが特に指摘してゐる所である。

經濟人と教育者との間に著しい差別が存する、教育者の本質にとりて經濟ほど距りのある者はない。教育者は賃錢のために勞作せぬ。內的の強要から、內的の愛情から勞作する。愛情の原理と經濟の原理とは相反對する。ペスタロチは常に最貧者に接近した。老年に及んでもなほ凡ての貧者に與へた。併し、經濟の排除には制限がある。何となれば教育者は生徒の力を知らねばならぬ。教育者が生徒の要求を生徒の力不相應に高く見積つてはならぬ。私共は如何なる知識が最も功利的であるかを尋究する立場に立たないにしても、

社會的生活に於て實際の分擔を有する人間を陶冶する目的を認めねばならぬ。政治的領域に對する關係は複雑である。政治人は他の人に自分の意志を強ひ、他の人を柔順にし他の人を服従せしめる。これは教育者が屬する社會的根形式に反してゐる。エルゼ・ウオイグトレンドルは教育者は支配の愉快をもたねばならぬといふことを云つてゐるが、ケルシエンシュタイネルはこれに反對して居る。支配欲は眞の教育者の性質に適しないといふことには疑を容れる餘地がない。教育者は自己獨得の意志を生徒に印象せんと欲する事を放棄せねばならぬ。教育者は生徒の特殊性を尊重し、承認せねばならぬ。教育者は無我であらねばならぬ。教育者は自己獨得の仕事の背後に全く退かねばならぬ。年齢の優越や、職務上から來る自分の力によつて働く教育者もはや教育者ではない。これに反して內的の卓越、指導に於ける愉快は失敗せぬであらう。併し茲にも政治的特色が存するやうに思はれる。生徒が若ければ

若い程益々彼れを指導する意志——愛に負はれてゐる意志——が必要である。自律 (Autonomie) にまでの途は他律 (Heteronomie) を越えて行く。自らに従はうと欲する人は先づ他に従ふことを學ばねばならぬ。克己自制は支配の最深の形式であるが、教育に於ても最も重要なことである。

宗教的態度は教育者に最も近い。教育者が若い人格の全體を尊重し、これを價値の保持者として神聖に考ふることは疑もなく、宗教的特徴である。故に大教育者には屢々深い内的の信心を發見する。ペスタロチは教育者の宗教心は世界を肯定する宗教心であることを示してゐる。世界と世界の價値が否定せられる所には禁欲への途が通じて居り、教育への途が通じて居らぬ。「クリストフとエリゼ」といふ書物の中にペスタロチは次のやうにのべてゐる。「牧師は人々を人間の性に近く導くべきである。」「天國への道は地上の義務の充足である。」「私共が人間の父たる神への務を充足し、彼れを愛するや

うに、私共の同胞を愛する。」「自己を征服し、他のために生活し、死するに際して欣然たる情意と感謝の心とを表はすことは人間が宗教を有することを最も明白に物語る。」人々を彼等のために愛する人、價値の世界に對して人々の靈を開くために生活を捧げる人は常に宗教人である。茲に到達して始めて教育者の人格が完成する。

教育者は兒童の人間性、其の精神構造を愛護し、その健全なる發展を指導するために生活する。これがためには教育者は先づ兒童の靈を諸種の價値に對して開かねばならぬ。兒童の靈を諸種の價値に對して開くには、力強き、價値に充實せる教師の人格が中心に立たなければならぬ。國語の教授にしても、歴史の教授にしても、藝術の教授にしても、其の背後に力強き、價値に充實した教師の人格が立たなければ、兒童の精神構造の發展は失敗に終るであらう。何となれば茲に於ては單なる知識の傳達や、知力の訓練が問題では

ない。生徒の全人間の上に一定の教材によつて影響せねばならぬからである。價値の上に人格を建設せねばならないからである。これは人間のみがなしとげ得ることである。人格に於ては材料は單なる知識として、人間の中心に無關係に立つてゐない。材料は人格によつて體驗せられねばならぬ。材料のみを支配してゐる人は最善の教育者ではない。必要なる材料に練達してゐる上に價値の充實性が加はらねばならぬ。教育者の人間性愛が十分に結實するには教育者の文化價値愛が豊饒に結實して居なければならぬ。かうして始めて兒童の人間性を尊重し、愛護し、これを伸長せしめなければやまない熱火が燃え出でる。(Erich Stern, Einleitung in die Pädagogik, 205 222.)

大正十五年十月十日 初版印刷  
大正十五年十月十五日 初版發行

兒童の生活形式〔奥付〕

定價金一圓六拾錢

著者 守内喜一郎

發行者 藤原惣太郎  
東京市京橋區入舟町五丁目一番地

印刷者 藤原久治  
東京市芝區字田川町十番地



發行所 東京市京橋區入舟町五番 振替東京一八五一三番 明治圖書株式會社  
賣捌所 東京林六合館 大阪柳原書店 名古屋川瀬書店  
久留米菊竹金文堂 佐賀大坪惇信堂

(製本部……關根・中條製本)

(所刷印社星七二第 部刷印社會書圖治明)